

---

# クレイジーフック

桐原剣斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クレイジーフック

### 【Zコード】

Z2213F

### 【作者名】

桐原剣斗

### 【あらすじ】

とある高校に通っていた少年が襲われた衝撃の事件とは…？

## 第一章（前書き）

多少グロテスクな表現を致します

## 第一章

いつもとおなじ

まったくじゃないけど大してかわらない口だった

これからありえないことが起こるのに……

この話はこの約一時間前にさかのぼる……

母『行つてらっしゃい』

『おー』

俺は水沢光也、何処にでもいるまったく普通の高校一年生  
成績オール3

身長真ん中より一人分後ろ

彼女できたことない

部活は書道部

とてもなく普通でつまらない男、…

まあクラスの女子からすれば苗字しか覚えられない位の存在

そんな俺だった…

それは学校に行く途中…

なんらかわらないいつもと同じ通学路のままだった

そう…もちろん今日は違つ

電信柱から尻がみえてる…

家の高校の制服だ…

白邊じゃないが好奇心旺盛な俺が見て見ぬフリをするわけがない

『び、どうかしたの？』

女の子『あ～あのね、なんか釣り針に袖が引っかかるやつだったみたいなの…』

はい！皆の期待どおり！かあ～わあい～

いいねえいいねえこんな所でロマンスかよ！

三次元での萌え？

あり得ないものだとおもってたよ！

『ちよ、ちよっと貸してみて

昔から釣り好きな親父が散らかした釣り針のおかげでこの手の作業はお手のもの

『はい！取れたよ』

女の子『わあ～ありがとう』

『いいよ（>○<）気にしなくても（>・<）困ったときはお互  
様だしね』

決まつたあ～～カッケー俺！自分で自分に惚れるわマジド～

『それじゃあ俺は行くね～また学校で～』

女の子『あ、ありがとね～ホントに～』

『いいくつていいくつ（>○<）それじゃあ』

俺の脳内トレーニングの完全勝利だった…

ちなみに俺の頭じゃこれからハコマニッシュョンも完璧に構成され  
ている…

まずあの子のリボンは黄色だ…これはあの子が一年生だとこうひと  
をあらわす

次にスカートの折り目が完璧だ…この事から編入生だと書かれては  
間違いない

そして昨日のH.Rでの担任の大切なお言葉…

担任『明日から編入生が一人くる、そしてなんと…その内の一人がうちのクラスだぞ』

# 完璧！

学校が楽しみだなあ

完璧なショミーレーションを脳内で構築していくと、いつもより速く学校についていた……

『お~い光ちゃん』

『拓海、『よお』』

『ルル～す』

拓海『せつ あよお……無茶苦茶可愛い子がいてな……』

ああ……あの子だろうな……

『まう?』

「うん」はあえて知らぬふりをしておいた。そのほうがいい。うん

拓海『その子がお前を探してたぞ』

「へえ～！……えつ！？」

拓海『だからお前をさがしてたんだってー。』

『いやいや人違いだろー。』

拓海『ホントだつてー名前言われたし…』

『俺の名前ー?』

拓海『他に誰がいんだよ?』  
『だよなあ…』

ひやつほう(、、)

春だなー?—りゅあ春だなー?

いやこやまでまでーーー!

現実はそつ甘くなー!ーー今まで苦い想いをしてきたじゃないか!!  
焦るんじゃなー!ーー集中だー!ーに響く、慎重にだぞー!ーわかったか  
?俺!?

『まあどうでもここや、わざと上こいつよ』

拓海『んだよ…冷めてんなあ…』『お前もどうせ課題していないだろ  
?』

拓海『お前もつてことは……まさか！？』

『俺もだよ』

拓海『オイオイ頼むよ光ちゃん！！』

『また俺のをうつすきだったのか？』

拓海『当然！！』

『威張るな！』

頭を叩く

拓海『つてえ……』

『わりい大丈夫か？』

拓海『うん！』

『元気じやねえか！！！！』

拓海『まあな！！』

『だから威張るな！！』頭を叩く……が、スウェーバックでかわされ俺の手が誰かに当たった

？？？『さやつ……』

『ああ……じめ……』

『あつ……』

女の子『あつーあつきの人がだあー』

わあやつきの女の子だあ（^○^）

なあんて言つてる場合じゃあない……

いま俺の手が当たつた場所……

そり……この小柄な体のこの子の小さこが形の良い胸……

この子の様子からすると気がついていいようだ……

ホツと一息つく暇もなく後ろの視線に気付いた

拓海がニヤニヤしてくる……

アイコタクトで俺は言つてみた……

(…みてた?)

拓海(当たり前だろ、真つ正面だしな)

(なにが望みだ?)

拓海（課題（ ）…嫌とは言わないよな？）

（交渉成立だな）

俺と拓海は心の握手をかわした

そしてまた後ろの視線に気が付き、回れ右

「この二人は俺にホッヒー思つかせるつもりはないことみえる

女の子…お~い？

『ああ、「」めんめん』

（それじゃ分かつてるな？拓海？）

拓海（おう、所で物はどうある？）

（このバックの中だ。ただし数学しかしてねえからな）

拓海（上出来だ。これで契約完了だ）

（んじや、そういうことだな）

拓海（おう、達者でな）

（そつちもな）

『ええと……編入生だよね？』

(お互いの健闘を祈る)

拓海

うけたまわった

俺と拓海はお互い別々の道を歩みだした…

女の子』『やうだよー良くなかったね』

『見覚えがなかつたからね。それよつさつあつた奴が言つてたんだ  
けど…』

女の子』『うん なあに?』

『俺の事探してたつてホント?』

女の子』『あたしは水沢光也つて人さがしてたんだけどもしかして君  
?』

『ああ、うん一応ね』

女の子』『やつぱり君だつたのかあー』

『やつぱり…』

女の子』『うん 叔母さんからきいたとおりだつたからね セツキ会  
つたときからそうだと思ってたんだあ』

『叔母さんって?』

『水沢千鶴さん、君のお母さんだよ』

『ちよつとまつて……叔母さんってことは…………』

女の子『改めて自己紹介するね あたしの名前は水沢麻由  
久しぶりだね、光ちゃん』

『麻由つて…………ちよつとまつて…………お前あの麻由かー?』

麻由『あの麻由つて 酷いなあ 今も昔も変わらない可愛いくらい  
の麻由ちゃんじゅん』

『マジかよ……』約10年前……

俺の家には母親、父親、俺、そして麻由<sup>マユ</sup>、快<sup>カイ</sup>の五人で住んでいた

麻由と快は双子で、両親は多大な借金を抱えて蒸発していくた

親戚はいるものの、ほぼ全員から多かれ少なかれ金を借りて、その  
金を踏み倒した夫婦の子供を誰も引き取らうとはしなかった

そんな一人を俺の両親が引き取り、一年といつ短い期間だが本当の  
家族のような毎日をおくれていた

しかし

麻由はいつも笑ってなどいなかつた

俺が知っている麻由はいつもうつ向いていて、泣いているわけではないが笑顔をみせることもない…

まだ幼かつた俺は別に気に止めたこともなかつたが、今となれば大きな問題だつたと思う

そんな麻由を俺の両親はとても心配に思い、全力をあげて麻由の両親を探しあてた

しかし

見つかったのは母親だけで父親はもうこの世にはいなかつた

父親は高層ビルの屋上から身を投げた…

その身に莫大な生命保険をかえて……

そのおかげで見事借金返済は完了し、あとは一人を引き取るだけと

いう状況にあつたが…

行けなかつた、自分達の勝手で一人を押し付けて、一人は自分の事を恨んでいるのではないかという不安で、なかなか踏み出せないでいた

しかし今度は逆に俺の両親が麻由と快と一緒に暮らして欲しい」と言うふうに頼み込んだのだ

この言葉は一人の子供を押し付けたことを許してくれると「う気持ちと、それと同時に一人の子供は自分の事を恨んではないことをしめしていた…

これが俺の10年前、忘れてかけていた記憶の一ページ終了だその記憶の一ページにのつている麻由といま俺の目の前にいる麻由は全くの別人だ

いつたいなにがあったのか聞くのはタブーだら…ここはあえて聞かないほうがいいな…うん

『じゃあ職員室教えるから』

麻由『うん ありがと』

『うひちだよ』

職員室に行くまでの間麻由は休む事なく話続けた

昔は話すどじろか声すら聞いたことのなかつた麻由が「こんなに喋るとはな…

そんなこんなで適当にあいづひつてこむひにちひに職員室につき、麻由を送り出した

『それじゃあ俺、教室行くからな』

麻由『え〜一緒にきてよお』

『冗談じゃない……』今まで来るのにいつたい何人の視線を浴びて来たか…

『いや、俺も課題とかあるし…』

麻由『ちえ〜』

『それじゃあね』

麻由『うん またね』

俺は教室に向かう途中ある異変に気付いた…

それは

周辺のギャラリー（男子）の視線が違う！

恨みや妬みなどと少し違うが、なんだか… いや…なんとか  
…とても興味深そうな視線…

心当たりはさつき職員室においてきたから大丈夫だ

でも旨興味はあるんだな…

キーンゴーンカーンゴーン

五分前か…急いだ…

あつ課題！――！

ああ…教室に戻つてみたら待つてましたと言わんばかりに拓海がつ  
めよつてきた

拓海『せつ一ボクウ？お話をきいつか？』

『なにもないよ、そしてやめうよその口調』  
(中学の時に補導されたのを思い出すから)  
拓海(わりいわりい、あんときはやばかったな)

担任『おおい、席つけー』

拓海『おおつとー、じやあまた後でな』

『つたぐ』

担任『じゃあHR始めるまえに昨日も書いたけど、今日から編入生  
が来るぞーーー、じゃ、入って』

拓海きたきた

（つたぐ、冷やかさないでくれよ）

俺はうつ向き心の中で祈った  
(なにもしなければいいけど…)

ガラッ

クラスの空気がざわめく…

拓海が俺にアイコタクトで必死に訴える

拓海（おーーーどことだよーーー）

（なにがだ…ーーー）

俺が顔を上げて前を見ると黒板に名前を書く少女の姿があった

## 麻由と同じ黒髪

身長も同じくらい

しかしへロングだつた麻由に比べてボーライッシュな感じのショートヘアー

振り返つたその田は怒つてこうようにしかめつ面

そして転校初日とは思えない強気な口調で自己紹介した

『水沢 快ですよひしくお願ひします』

呆然とする俺と拓海…

その時隣のクラスからざわめきが聞こえた

俺＆拓海『そ、うきたか…』 担任『ん~と、それじゃあ…』

担任の目があいている席を探しているのがわかる…

空いている席は……俺は右の空席をみた……  
ここしかないよな……

拓海も全く同じ事をしていた

クラスに一人分のため息が響いた…

担任『光也か拓海は水沢さんに教科書みせてやつてくれ』

俺 & 拓海『ううい』

担任『あつちやあ～、H.Rの時間なくなつちやつたなあ～。まあいいか、お前ら一時間目遅れんなよ！そんじや終わりつ！解散！』

俺はすぐさま拓海を連れて便所に直行！お互に妙に真剣な顔で

拓海『予想の範囲外だな…』

『…お前が教科書見せてやつてくれよな…』

拓海『は！？お前は見せねえのかよ！？』

『……お願いだから……な？俺とお前の仲じやないか？』

拓海『なんかあつたのか？』

『あいっ…とてつもなく怖いんだ…』

拓海『なにがあつたか言つてくれ』

『む…昔俺がイタズラでアイツの布団にゴムでできたゴキブリを入れて驚かそうとしたんだ…』

拓海『あ…あ…それで…』

『俺の予想ではおもちゃ、「キブリに驚いて追いかけ回されて終わりだつたんだけど、あいつ本気で驚いて…マジギレになつて追いかけ回されてるだけじゃなく、ほほリンチ状態にまで殺られ病院送り…俺が入院している間に引っ越したんだ…』

拓海『あの子がその事を根に持っていたとしたら……』

『あああーーーー止めてくれーーーそれ以上言わないでくれーーー！』

拓海『わーーわかったから落ち着け、俺が教科書見せるから……』

『あーーありがとーーーありがとーーー』

拓海『よせよーー俺達の仲じやないか』

『たーー拓海ーーー』

拓海『困つたときはお互い様よーー』

『お前を友にもつた事を誇りに思つよ』

拓海『よせやーーほれ、授業始まつちまつ』

『そーだなーー急ごう』俺達が教室に戻つてみるとすでに授業は始まついて、静まりかえつた皆の視線は元気よく入ってきた俺達一人にあつた

『…………トイレにいつていきました……』

先生『わかったー座れ』

『……はい』

この先生は空気が読めるタイプでよかつた

俺はそのまま拓海に視線を送つてみると、あこつは向やう机の中や鞄の中をゴソゴソやつている

おい…

まさかでめえ…

拓海『先生教科書忘れました…』

先生『またかお前一つたく…』

ヴォオオイー！……！（）拓海イイイイー！……？

拓海はこいつを見るとジョスチャーでこいつ俺に訴えた

「わりい」

（わりいって！…でめえふざけんなよ！…さつきまでトイレで熱い友情を交わしてたじやねえか！…！おい！？あれどここいつたんだよ！？）

快『…………ねえ？』

拓海（そんなこと言つたつてしまつがねえじゃねえか！？間違えて明日の時間割りしてきちまつたんだ！…）

(明日の時間割りって言ひつと……今日が国語、理科、保健、保健、数学、社会だから……明日は……体育、体育、美術、英語、選択、選択だから……この馬鹿野郎！…………ダメダメじやねえか……だいたいお前はいつも……)

快『ねえつたら……』

『うわあ……』

皆が俺に視線を送る

先生『水沢あ～職員室行きたいか?』

『いや、それは困ります……』

クラスの雰囲気が一旦和やかになる

空気が読めるタイプの先生は助かる

快『いきなり大きな声出さないでよ!恥ずかしい』

『ああ……めん』

快『まあいいわ、今日の放課後話あるから時間空けといて』

『ああ……ええ!?!?』

先生『水沢あ～お前後で職員室な』

気が付くと皆がまた俺に視線を送っていた……拓海まで……  
拓海の表情が…………「ヤーヤーすんな拓海イイイイ……！」

拓海（楽しそうにしてるね～）

（ビ〜がだよー!?)

拓海（わりいわりい…カツサンド斬るからよ）

（うつ……わ…わかった…もうこ ciò…）

拓海  
わかりやあいいんだ

（つたぐ…）

先生『お……おい水沢…職員室の話は冗談だからそんな落ち込むな  
よ?……な?』

『あ……ああ…すみません…』

先生『ホントしっかりしてくれよ……本氣で心配したじゃねえか…

…』

『す…すみません』

俺は立つたままでいたため冷たい視線はずつと俺に串刺しだった

俺と先生の会話を聞いてクスリとも笑わないなんて相変わらず冷たいクラスだ…

俺嫌われてんのかな？そんなこんなで待ちに待つたお昼ご飯の時間『カツツサアンド、カツツサアンド、カツツサアンド、カツツサアンド』

拓海『わかつた、わかつたから』

そこでなぜかクラスの皆があつまつてきた

クラスの皆『カツツサアンド、カツツサアンド、カツツサアンド、カツツサアンド、カツツサアンド』

ああ……拓海の顔がみるみるうちに青ざめていく。つかなんだこの微妙なノリは！？逆に怖え…

あつー拓海がそろそろヤバい…

クラスの皆『…………フツ…………』

ああ……もう十分に楽しんだんだな……皆帰つてく…

拓海はしばらく立ちすくみ、浮かない顔で俺にカツサンドをねりついた

拓海『んで、どうなったわけよ？』

拓海は気をとりなおしてはなしあじめたが、いつも元気はもぢり  
んじゃない

『今日の放課後話があるんだよ』

拓海『ふうへん』

食い付いてこない……

拓海『まあ殺られなによひにじとけよ』

『え……えんぎでもなこと」と囁つなかよ

拓海『ハハハ[冗談だよ]』

『…………まあ』

拓海『どした?』

『俺…………どうなるんだろう……』

拓海『なあに気にすんなつて!ボコボコされたつて言つてたけど、  
それ何年も昔だろ?』

『ま……まあな』

拓海『だから大丈夫だつて!な?といあえず今はカツサンドでも食  
つて楽しくいこぜ』

『そ……そうだよな』

拓海『そうだそうだ』

『サンキュー！なんか元気でてきた』

拓海『こざとなつてもお前、そういうの奴には負けないしな』

『そんなことないよ』

こつして昼休みの時間は終わつて行つたそして時はゆつくりと、しかし確實に進み、とうとう約束の放課後一步手前にあたるH.R前の掃除に入つていた

『…………はあ』

男子用便器を見つめて俺はため息をついた

すでに脳内では考えられるシチュエーションを完璧にファイルアップしていた

しかし

不安で仕方ない俺のため息は止まる事を知らなかつた

『…………はあ』

クラスで目立たない女子『あの…水沢君…』  
『ん？なに？』

クラスで目立たない女子『水沢君を呼んでる子がいるんだけど…名前…わからなくて…』

。。。まさか。。。いや絶対そうだろうな。。。#6

クラスで目立たない女子『あ…うん』

さあ覚悟を決めろ俺！！

「お待たせ」

麻由『おもいよ』

「……なんだ麻由かあ～緊張して損だよホント  
『えつ！？』  
麻由『あ～なあに？そのホツとした顔～』

麻由『快ちゃんかと思った?』

『ん：んなことないよ』

麻由『それはそうと……はい、じれ叔母さんから』

۷

わたされたのは紙切れと五千円札だつた

間違つても小遣いではないだろつ。家の親はケチだ

さて問題は紙切れだ

なになに?

- ・卵一パック
- ・牛口ース×2
- ・豚口ース×2
- ・白菜
- ・春菊
- ・えのき
- ・醤油

お釣りはやる。頼んだ

といった内容だった

要するにお使いか

まあお釣りはくれるって言つんだから別に悪い仕事じやないな

麻由『じゃああたし行くね』

『ん…ああ、ありがとな』

麻由は振り返つて可愛らしい笑顔を見せて帰つて行つた

ホントに可愛らしくくなっちゃつて…

さて、俺も行くかな  
俺が教室に入ると全員の生徒と担任の視線が一気に俺に突き刺さつた

時計を確認…

HRまであと五分ある…

拓海も座つてゐる

なにも心配することはないんだ!!俺は時間通りに教室に入つて、普段どおりにしている……なのに……なんで皆俺が席に着いても田をそらせないんだよ!!!!

担任『よしHRはじめるぞ! なあ水沢!』

『えつ……はつ……はい』

担任『明日は時間割りの変更もないし俺、この後職員会議だからこれで終わるぞ! あい起立! 解散!』

なんなんだ…?

拓海『かえるか?』

『あ……ああ

拓海』そつこやあ例の転校生さんとお話があつたんじやなかつたか  
?』

『あ……ああ……そつだけど』

『光也……』

一瞬びくっとして振り向いたその先には

快『ひりひとつとれて……』

快だつた……

(拓海いー)

拓海(ファイト!-)

(うー)

快『早くー。』

『あーい……』

俺はお話を『左腕みせ

て』

『は?』

快『いいから……』

『あ……あ……』

快『なんともなっていないわよね?』

『別に変なところはないと思ひたが……』

快『ふう～よかつたあ』

『よかつた?』

快『あんた昔あたしに左腕折られて入院したでしょ?まさかあたしも入院するとは思つてなかつたから…しかも会えないまま引っ越しちやつたし…結構心配してたのよ?』

『そ……そつか』

快『な……なによー』

『別に』

快『もう一で、その……あ、あの時は……その……』

『ん?』

快『…………めん』

『へ?』

快『なんでもないわよ……そんだけ……じゃね』

『あ……あ……』

快が屋上の扉を閉めたと同時に俺はへたりこんだ

(…………シンデレラ)

話が終わつたのを嗅ぎ付けてか拓海がやつて來た

拓海『どうだつたよ?』

『なあ拓海……』

拓海『ん?』

『シンデレラ!どう御座り?』

拓海『なんだいきなり?』

『いや……なんでもないよ……』

拓海『へんなやつ、まあこいやー行くか

『ああ!スーパーが閉まつちまつしな』

疲れた拓海『スーパーって俺ん家のか?』

『おう』

拓海『高くてくせば』

『あて…商店街の方こと…』

拓海『冗談冗談ほりーこいづか』

『察しのとおりこいつの家はスーパーだ。そのよしみで安くいい品を提供してもらつたことも何度もある。まあ困ったときはお互い様つて奴だ

『あて……まずは肉類と…』

拓海『お密やん…』ひがなんか、いかがですかい?』

『お…お前…ここつか…』

拓海『へへ…お密やんもついてるねえ…このスーパー開店以来人気NO.1最高級、牛の詰め合わせだ…』

『驚くのは『じやない』だろ?』

拓海『ハハハ…お密やん…あんた、ただ者じやないね?』

『俺がその容器の破損を見落とすとでも思ったか?』

拓海『へつ……負けたよ……もとより処分するもの……普段は2500円のところ……1000円で持つて行きな』

『悪いがその品……3000円で貰い受けける』

拓海『あ……あんた正気か?』

『ただし……』

拓海『ひつ』

『豚肉、白菜、その他もろもろ準備しな』

拓海『お姫さん……やつぱりあんただ者じやあねえよ……』

『利益は利益……お互い楽しんでいいひばり……』

拓海『……へつ……完敗だよ……』拓海『ありがとひばりこました』

『じやあな』

拓海『また明日な』

『ひつて拓海とも別れを告げ、俺は家路へと歩む道のりを選んだ

スーパーまで来てしまえば皿もまでは一キロもない。次の角を曲がつてしまつすぐ行けば皿もだ

あ…

電柱の影から尻が見えてる……

近寄つてみたら俺の予想通りの展開がまつっていた

『なにやつてんの?』

快『…………助けなさいよ』

快だつた

『つたく…ちよつとじごこち』

快『……うん』

ここにも釣り針に引っかかっていた

『なあ…』

快『なによ?』

『お前ら姉妹人間に産まれてよかつたな』

快『はへぢょつとーぢりこづ意味よー?それーー.』

『帰つて麻由に聞いてみたり?』

快『麻由ねえがどうかしたの?』

『だから聞いてみれば?』

快『?』

『はい、取れたよ。じゃあね』

快『ああ……ちょっとほつれてるじゃない……待ちなさいよ……』

俺は早足でその場を立ち去るのをしたが自宅の前で追い付かれた

『何だよ』

快『なによ……そんなに冷たくしなくてもいいじゃない……』

!――軽く泣き声になつてやがる…

『…………わるかったよ』

快はソッポをむく

人が謝つてるのに態度が悪いったらありやしない

『じゃあね』

俺は快を置いて自宅に入った

はずだった

俺が自宅に入つて三秒後

快『ただいま』

『住むの?』

……ひら

快『住むわよ』

…………はあ……予想の範囲内だったから良かつたもののどうしたとか……まさに最悪の事態だ

拓海にバレル位ならまだいい

あいつは口止めすればそうそつ裏切るような奴じやないし、逆手に  
とつて攻めてくる奴でもない

問題はクラスの噂好きバス集団だ

奴らにこの事が知れれば学年中、いや学校中に……下手すれば町中にしれわたる事になる……それだけはなんとしても避けるべき事態だ

：

快『叔母さん今帰りましたあ』

母『あらお帰り快ちゃん。遅かったじゃない』

快『ちよつと帰り道で迷ひやつて』

快が一瞬じつを睨む

睨むな

そつこえは買い物袋を持ったままだった

『ひい』

『二〇〇〇円』

母『あらお疲れさま。お釣りはござれべうてだった?』

母親は少し驚いたよつすをしたあと苦虫を噛んだよつな顔をした。  
おおよそメモ書きの内容を後悔してくるのだろう

母『今日ますき焼きよ』

『買った物を見れば分かるよ』

母『あら、ほんとね』

『じゃあ俺部屋にいるから』

母『出来たら呼ぶからね』

『おお』

俺が部屋に入るとなんとも面白い出来事が俺を静かに待っていた扉を開けると廊下とは格段にちがつ心地よい冷気が充満していた

エアコンがかかっている。しまった…消し忘れた

俺は学ランを脱ぎ捨てて、室内着に着替え、ベッドに横になった

夕食までの時間、少しの間眠るのも一日の中の小さな楽しみだ

俺は窓から見える雲をながめ、静かに眠りについた……ん？……

妙に暑い……

不快な暑さにあてられ俺は目を覚ました

エアコンをかけたはずになぜか暑い……

いや……

涼しいことは涼しい。だがしかしながらうつベッドがなぜか蒸し暑い……

とくに体の左半分が……

冷静になれ俺！！解説に入りたい気持ちもわかる！！わかるがしかし今はその時ではない！！落ち着いて周りを見渡せ！！ここは俺の部屋だな？よし！そのようだ…時計をみるかぎり夕食までに約10分の余裕がある…落ち着く時間はたっぷりとある！！まずは状況把握！俺は普段着のままだ！とくに乱れたようすはない。とりあえず最悪の事態は免れたようだ……いやいや俺に元からそんな趣味はない！！これは俺の魂に誓える…！よし！

冷静さを取り戻した！

うん！もう大丈夫だ！

さてこの子は誰なんだ？

俺が再度左を見ると

おや？いない…

試しに右を見てみた

いた…

ベッドから下りて俺の真下に正座してその大きく開かれた眼でじっとこっちを見ている

あまりの緊張感に俺も正座になる

沈黙が続く…

とつねんべす

誰か聞いてみよいかと正座をヒンヒンしたとき沈黙は破られた

女の方『…………おトネ』

1

女の子『おトイレ行きたい』

『おはようございます』

## 女子『どー?』

『まづ廊下をまっすぐいつて突き当たりのドアを右にいつて……』

女の子『わからなー』

『じゃあ連れてきてあけるから…』

女の子『だつこ！』

! ? ! ?

抱っこ！？

マジ！？

女の子『漏れる……』

『ああ、わかったわかったほらー。』

俺はこの子を抱っこにしてトイレに連れていった

女の子『一人でできるー。』

『ああ』

よかつた~出来ないって言われたらどうしようかと思つた

すると

じぱりくじて女の子は出てきた

女の子『終わつた~』

『おお』

俺がこの子と一緒に部屋に戻るつとした時

母『光也あ～～飯～』

『へい……じゃあ行こつか……』

女の子『うん!』母『あら?小乃ひちゃんも一緒に

『小乃ひちゃん?』

小乃『あたし』

『ああね…』

母『じゃあい飯よ』

『おお』

小乃『い飯～』

小乃はトコトコと走つて行つた。遅れて俺が居間に行つてみると

麻由『光ちゃんあ～ん』

快『遅い…』

小乃『光ちゃんひらひら…』

あ～…………皆いるね…

ホントに住むんだ：

いや、まだ確定したわけじゃない一応聞いてみる、これも大切なことだよな、うん！

『なあ快…』

快『…………』

「のやうひ

『快

快『ん？なに？』

『お前ら家に……』

俺は途中で言つのを止めた。理由は言つまでもない、何故ならすでに快の耳は俺の言葉を捕らえていないからだ……快の意識は俺ではなく完全にすき焼きに向かつての全力疾走真っ最中だった

うん……こいつは諦めよ……

小乃『光ちゃん光ちゃん』

気付けば小乃が満面の笑みで俺の膝に座っていた

『ん?』

小乃『お腹すいた』

『ああ……ちょっとまつてな……もつすぐできるから』

小乃『むう……』

ふくれやがつた

『なあ 麻由』

麻由『なあに? 光ちゃん?』

よかつた……こいつは大丈夫だ……

『お前、りつて家に…』

麻由『住むよ

即答かあ～

あいたあ～

やつぱりかあ～

母『はーーーもー食いわよ。食べて食べて

麻由『はーーい

快『いただきます』

俺が考えこんでいるうちに食事が始ましたが、やはり先人をきつたのは麻由&快だった

ああ……肉が……俺が取るのとしていた肉が……

俺はこいつらを完全に舐めていた、こいつらときたら完璧なフォームーションで俺の食事を阻止しやがる

快の野郎は俺が取った肉を箸ではたきおとして奪いやがる

麻由はもっとたちが悪い、俺が取るのとした肉を速攻奪いやがる

なんとか一人が食べている途中に取らつとすると今度は小乃があれ食べたいこれ食べたいなどと言つて俺に食わせてくんねえ……

ちなみにこの日の俺の食事は『』飯と白菜だけだつた悪魔の二人がほぼ全ての肉を食いつぶしたのを見計らい俺は切り出した

『さて、本題に入るけど……』

麻由『へ?』

『なんでこの家に帰つて来たの?』

麻由『ん~あたし達はその事あんまりよくわかんないんだ』

快『一昨日いきなり二つの家に行けつて言われてね

母『なんだかいろいろあるみたいね』

『ふう~ん……じゃあ一人も詳しくは知らないんだな』

麻由『そゆこと』

『じゃあ次の質問だけどさ』

俺は膝の上で筋の肉と格闘している小乃を指差した

『だれ?』

快『妹

『あ～やつぱり、叔母さん結婚したの?』

母『あら? あんた知らなかつたの?』

『あ

母『うう～ええば結婚式のときあんた風邪ひいてたもんねえ』

『ああな

母『田那れさんはお父さんの世の回僚セヨ』

『へえ

聞きたいことは聞いて飯もおおかた食べ終わり俺が部屋に戻りつと  
したとき、俺の携帯の電話がなつた

相手は……拓海か……

俺は居間を抜け玄関から外に出て通話ボタンを押した

『よお

拓海『おお

『なんかよつか?』

拓海『相変わらず冷たいなあ……まあいいや。今から外、出れるか?』

『ああ……大丈夫だけ……』

拓海『ホントか?助かった!いやあなたにしろチャリがイカれちまつてよ、あれが治せんのはお前くらいだからな』

『おいおい誰もタダで治すなんて言つてねえぞ』

拓海『あいあい、分かってるよー300な』

『毎度あり』

拓海『んじゃ頼むな

『おう』

約一時間後

俺が拓海のチャリを治し家に帰ろうとチャリをぶつとばしていた

時間はすでに夜の10時、深夜とまではいかないがなかなか遅い時間帯のため急がないと補導される

補導だけは勘弁してほしい…………

俺は補導員に気をつけながらも途中にあるあの電信柱の前でチャリ

を止めた

ふと今田一日の事を想って思ふ…

はあ…

ため息しか出ない

いつもなんら変わりない一日はこの日が日本で最後の日だった…

俺は一息ついてまたチャリを遭りました

やつ…

いつもなんら変わりない一日はこの日が日本で最後の日だった…  
俺は家についてすぐにこの疲れた体を湯船につけ、体を洗い頭

を洗つた

あまりにも眠気が凄まじいため早めに風呂から上がり俺は床についた  
ひんやりとした心地よい冷気

そのなかでも暖かい布団の中

いつまでも眠れてしまつ位の心地よさ

こんなにもさわやかなお田覓めがこままでにあつただらうか?

しかしながらうつ?

俺はこの状況を知っている

俺は布団の中を見た

小乃が寝ている

なぜだ……

なぜこやつがここにいる?

よおへ思ひ出せ

昨夜帰ってきて風呂に入つて着替えて布団に入つて

布団に入つて小乃が枕を持ってきて一緒に寝るつて駄々こねて許可

あ

あちやー

やつちつた…

俺は小乃に視線を戻した…居ない

右を見た…いた

小乃『おト…』  
『わかつた!』

俺は小乃をおんぶしてトイレに向かつた

小乃がトイレに入っている間俺は扉の前で待っていた

俺がふとトイレの右側の洗面所を見ると頭が大変な事になつていて  
快がいた

『…はよ』

快『おはよ

早く出てこい小乃！小乃『ひやう』

『おー終わったな、ほら早く姉ちゃんといこか』

小乃  
は  
い

ふう

小乃『快姉ちゃん、麻由姉ちゃんは?』

快『あ、まだ寝てるね』

小乃『起こしてくるね』

快『よし！行つてこい！』

小乃はい

小乃は一目散に俺の隣の部屋で寝ている麻由のもとに走つていった

『まおな』

快『わあて朝』はん朝』はん！ ほり行くぞ光也』

「へいへい」

俺は快の異様に高いテンションに引きずり回されながら食卓に向かつた…………疲れる

母『あら快ちゃんおはよつ すいぶんと早くのね光せこも見頃つて欲しいことよ』

『いのよ』

母『あらホンター』

俺の母親は明るく笑いながら台所に帰つて行った。テーブルの上にはコーンフレークと牛乳が並べてあり、人数分のお皿がある

快『ふうへん…』の家のシリアルも久しづりね』

『だな』

快『食事中にテレビを見ない決まりそのままよね』

『当たり前だ』

快『…変わつてないね』

『まあな』

この会話はこれで終了した。快はこのあと麻由が小乃に連れられてくるまでの約十分間なんだかぼー…つとしていた。しかし何というか…この家をゆっくりと見渡して柔らかい笑顔を浮かべているよう

に俺は見えた…

こんな朝ごはんもいいかも知れない

そんな朝だった

なあんてゆつくりする時間もそつ長くは続かない

いつもは一人で食べるもんだからすぐ準備出来たのだがこの人数だ  
…無理がある

遅刻まで約十分

俺は自転車だからまだ大丈夫だ！しかし問題はこの二人…

この時間…三人そろって間に合つには手段がたつた一つしかない

それは…

三人乗りだ！

通常自転車の多人数乗車は一人乗りが全国的にオーソドックスだ！  
しかし暗黙の自転車業界では限界を超えた荒業！三人乗りが実在  
した

これはまず一人が普通にハブにあしをかけ、前の人の肩を掴む基本  
的な乗りかただ

しかし三人乗りはその上、サドルにもう一人のせるのだ

これにより自転車の重心は三人の内の誰かにほぼランダムに片寄る、それゆえ危険性が高く、俺のように熟練したライダー級がやってはじめたものになる

学校に遅刻しない為にはこの方法しかない…

『快、麻由は俺のチャリに乗れ』

快『え～三人乗りい？』

麻由『ちょっとキツくない？』

『運転するのは俺だし大丈夫』

快『もう時間ないし仕方ないね』

麻由『うう～…』

快『ほらー！ 麻由いくよ』

麻由『ふあ～し……』

俺達は早速チャリに乗り込んだ

快『光也もつとつめてよー』

『つるせえな～つちもきついんだぞ立ち漕ぎだし』

麻由『快もつ～かないでよ～』

『よしーお前らのつたか?』

快『ギリギリね』

麻由『きついね~やつぱり』

『じゃあ行くぞ』

俺は勢いをつけてクソ重いペダルを踏み込んだ

小乃『光ちゃんいつてらっしゃあ~い』

小乃が元気良く手をふっていた

一人っ子の俺にとってなかなか嬉しい見送りだった、思わず顔がに  
やける

俺はいてもたつてもいられず振り向いた

……もう家に入つてやがった

『とばすぞーー。』

恥ずかしさを紛らわすにはいつするしかなかつた

俺は自転車のギアを一段階上げて一気にスピードをあげ、学校を目指した俺の力作である改造ギアのおかげで自転車はほぼ車と同じ位のスピードがでる

当然運転の難易度は高くなるのだがこの俺がそんなところの訓練を怠るわけがない

この自転車のギアは50段階までありだいたい10辺りが普通の自転車の速度となる

ギア1で登れない坂はないし、ギア50では時速250kmで走ることができる超ハイテク自転車だ

もちろんだが一般人に乗れる訳もなく俺が2年間修行してやつとのりこなした

つてなことを言つてゐるうちに学校に着いた

まだあと五分も時間があまつてゐる

俺は自転車を駐輪場にとめ、快と麻由と三人で教室を目指した

教室に向かうにはグラウンドを横切らなければ行けないが今日は少しグラウンドの……いや、学校そのものの様子がおかしい

何故だろ？

後五分でHRが始まるところに沢山の生徒がグラウンドでサッカーやテニス、バレーなどをして一向に教室へ向かう気配がない

ふと教室まで目線を変えてみた

数々の生徒が窓際でお喋りをしていたり教室の中を走り回っていたりしている

そう……まるで休み時間や昼休みのような自由な時間…………そんな感じだ

キーンゴーンカーンゴーン

よれいがなつた、これでは流石に皆教室に戻るだろ?と思つたがやはりそろは行かなかつた

誰もがよれいを全く気にせず自分達の時間を楽しんでいた

『どうこういじだ?』

快『なんか変だね』

麻由『まあいいじゃん 齧氣にしてないみたいだし ゆっくりいこ  
』

『そ……そつだな』

よくよく考えてみればこうなったのも何らかの理由があるはずだ  
といつあえず教室へ向かってみよつなかわかるだろうしな』といつあ  
えず教室に行つてみるか』

俺は振り返つて快と麻由に言つた

つもりだつた

しかしそこには一人の姿はなく、かわりに  
「クラスで目立たない女子」がいた

俺はふと下駄箱の方をみたが二人はすでに上履きに履き替え、教室  
へとつながる階段を登つていた

クラスで目立たない女子『そ……そつだな』

あちやー

恥ずかし…

『じゃあ……行こつか…』

うん…突き通そつ…それがいい…それが最善の選択だ！間違いない

クラスで目立たない女子『あのあ…』

『ん? なに?』

クラスで目立たない女子『水沢君私の名前知ってる?』

…………知らない

俺の頭の中ではもうすでに  
「クラスで目立たない女子」で定着してたからなあ…………えーとたしか吉川か谷田だったと思つんだけど……

クラスで目立たない女子『玉木瑠璃だからね』

『わ…わかってるよクラスメートだしな』

あつぶねえ～マジで言わなくてよかつたマジで

『そついえば玉木さん今日は学校来るのやけにウガガア！…』

何者かに背中どつかれた、誰だ！？

拓海『よつー光ちゃん』

お前か……

『「ホシ…ホリ』

瑠璃『おはよ拓海君』

拓海『何やら珍しい組み合せだな』

『あたまにはな

拓海『ほお～』

瑠璃『じゃあわたし友達が来たからこ～ね』

『あ…ああ』

拓海『おうーまたなあ』

瑠璃は一度手を降つて女の子グループの中に溶け込んで行った、その証拠にもう何処にいるのかわからない…ホントに地味だ

ふと意識を拓海に戻すと奴は俺になにか聞きたそうにしてやがる

拓海がなにやら考え付くまで何とか先手を取つておく必要がある  
な

『チャリビんなかんじだ?』

よしー

拓海『おうおうやつぱつお前に頼んだら違つねえ。ギアチーンジの違和感がまるでねえよ』

『やつぱつひつか。まあ教室行きながら話すか』

拓海『だな』

よしー完璧だ危ない橋だつたがなんとか乗り越えた。それにこいつには聞きたいことがあるしな

『なあ？なんで今日は皆遊んでるんだ？』

拓海『まあな…まあ大体予想はつくけどな』

『…』

拓海『まあいいやとりあえず教室行けばわかるだろ』

『やつだな』

拓海『といひでお前瑠璃となに話してたんだ？』

—やつへび

『時間割だよ時間割』

拓海『ほお～』

拓海『まつたくお兄さんもお若いのに大変だねえ……こんな朝早くから学年美人を三人も…』

教室前の廊下に差し掛かったところで拓海が元気にちよっかいを出してきた

『だから誤解されるからやめてくれ、お前が「冗談で言つてるのはわかる、だからわざわざ女子のお話グループとすれ違つ時に言つのはやめてくれお願ひだから…』

拓海『わかったから……な？そんな今にも泣きそうな顔で言うなよな？わっ！ちょ……泣くなつて……俺が悪かつたからな？泣き止めよ』

『いや、泣いてねえよ！だから人が勘違いするようなこと言わないで！』

拓海『わりいわりい』

そんなこんなで俺達が教室に入つてみると自分達の机の上に一枚ずつプリントが置いてあった

それは

「本日職員緊急会議により午前中までの授業とする。会議の都合で

全授業自習とする。自習の科目は個人に任せせるが、眞面目に取り組むこと「  
といったものだった

そつか、だから眞面目に元気に体育の自習をしているわけかあ：

そつかあ……まあだれも間違つてないナビ……なんかなあ……

拓海『よしー光ちゃん、バドミントンやね?つい一・バドミントン・』

『おう』

まあせつかくの機会だ楽しんでいい

『やつこえばれあ』

俺は体操服を着て、グラウンドに向かつ準備万端な拓海に問い合わせた

拓海『あん?』

『緊急会議ってなんだろうな?誰か捕まつたのか?』

拓海『いや、多分あれだろ』

『あれ?』

拓海『世界中を揺るがす大事件だつたからなあ……』

『なにかあつたのか?』

拓海『やあつぱり光ちゃんは知らなかつたか、そうだよな……』

『何だよ』

拓海『いや、光ちゃん家、朝は絶対テレビ見ないから知ることが出来ないんだ。まあ仕方ない』

『だから何があつたんだよ?』

拓海『…………殺されたんだよ』

『だ……誰が?』

拓海『天上陛下だよ』

『…………マジかよ』

その一言で俺の体の全ての毛穴から冷たい汗が吹き出るのを感じた

拓海『もう世間は大混乱だ……新聞は全面その記事だし、テレビは全て同じ放送だ』

『いつたいなんで……』

拓海『俺の裏最有力情報によると日本は影で戦争を繰り返してたら  
しい』

『ビートの国と...』

拓海『たしか北超鮮だったと思つ』

『つてことは日本...負けたのか...』

拓海『ああ...』

『これから多分大変な世の中になるだろ?』

拓海『少なくとも今までみたいに遊んではいけない毎日が待つて  
ると思つ』

『自分の身は自分で守らないとな...』

拓海『だから...』

『ん?』

拓海『だから今の幸せを噛み締めておけ...それが一番だ』

『だな』

拓海『とつあえずバドミントンだー・バドミントンー...』

『おー...』

俺と拓海はグラウンドに走った。今の現実から逃げるよう俺達の  
…おそらく最後の遊んでいる時間は刻々と過ぎてゆき、ついに終  
わりを迎えた

拓海と俺はなかなかの勝負を繰り広げ、数人のギャラリーがつくほ  
どだった

いや、ギャラリーではない…よくみると金のやり取りをしてる…  
賭けてやがったか！「ごめんな…俺に賭けてくれたやつ…

拓海『よしーかえるか』

『だな』

俺達がバドミントンのワケシットと羽を片付けてること後ろからつ  
つかれた

『ついて』

麻由『へへへ』

麻由と快だった

『麻由か』

拓海『ヤッホー麻由ちゃん』

麻由『ヤッホーたっくん』

『快』もつぱる。『快』

『あ』

『快』じやあ帰る。『

『そんなに急ぐことはないんだが』

『快』……『

『わかったわかった！しゃあない行くか

拓海』おう

『お前今田チャリか？』

拓海』ああ

『ひとりたのむ』

拓海』じよーかい！ 麻由ちゃんのる。』

麻由』おねがいね

『じやあ行くか！ほらのれ快

快』じやんと運転してよね

『あいあい』

快『ひいひいひいと早くなー』『

『普通だろ?』

快『で……でも学校来るとまわづか……』

『そりゃあ二人も乗つてればスピード落ちるよ』

快『それはそうだけど……』

無理もない……いまのギアは30

だいたい約時速80kmは出でているから慣れないうつからすれば  
まあ早いわな

俺がいつも拓海と一緒に行動するときはこれ位で走つてゐるけど普通  
の自転車の速度じゃありえないスピードでぶつじばしてゐかりそれで  
かし怖いだらうな

ほとんど抱きつかれた形になつてゐ

『なあ……運転じりいんだけど』

快『じゃあスピード落としなさいよ……あんたは普通に乗つてゐ  
どあたしからすれば半端じやないんだから……』

『よしみてみへ』

快『え?』

その横で麻由が平然とハブの上に立つて時速80kmの世界を堪能していた

麻由『お～い快ちゃん』

快『…………』

『スピード、落とすか?』

快『…………いい』

快は恐る恐る背筋を伸ばしてみようとしたらしいが失敗に終わり、俺に抱きつかれた形に戻り、静かになった

そんなこんなで拓海のスーパーに到着し、拓海と別れを告げた拓海  
『今日は肉、いらねえのか?』

『おあいにく様今日はチャーハンだよ』

麻由『チャーハンか…………』

快『チャーハン…』

拓海『チャーハンだつてよ

麻由&快『…………』

『え? なに? 嫌なの?』

『 麻由 』 べつにい

『 ちなみに今日俺が作るからな 』

『 快 』

『 うん 快 そんな顔しないで 』

『 麻由 』 は はは

『 作り笑い やめて 』

『 拓海 』 だから泣くなつてーな?

『 だから泣いてねえよ あれ? 涙が くそ 止まらねえ 』

『 快 』

『 麻由 』

『 拓海 』

『 』

『 あ 』

快『……帰ろつか』

『……うん』

麻由『……もうすぐそこだし歩いて帰る』

『わうだな』

快『チャ…チャーハン食べたいな…』

麻由『そ…そうだね』

『今日…昨日の残りのすき焼きでいいか?』

快『残念だけどしようがないね!』

麻由『ああ～あチャーハンたべたかったなあ』

虚しくも悲しい会話が俺達を包み込み、家についた

俺が自転車の鍵をかけ、家に入ろうとした瞬間、俺より先にドアは開いた母『光!!!よかつた!!!きなさい!!!』

『な、何だよ!…?』

俺は引っ張られながら家に入つていった

母『いいから早く』

『なんなんだよ!…?』

母『父さんから電話よ…話はそのあとあるから急いで…!』

『はあ～つひ」とま病院からへ。』

母『いいから』

俺は言われるがまま受話器を取った

『もしもし?』

父『コホッ…光也か?』

『ー?……ああ』

親父の声はあきらかに様子がおかしかった

息づかいは荒く、今にも死にそうな声だ

『おい…どうかしたのかよ?』

父『なあになんでもない……気にするな』

『でも…』

父『いいか光也?』

俺に被せて少し強い声で親父は話した

『何だよ?』

父『お前も勘づいてると思うが父さんとお前の会話は多分これが

『最後だ……』

『なに言つてんだよ……』

父『お前にはせめて普通の生活をさせてやりたかった……すまないな…』

『ビツつこう意味だよ！…』

父『父さんの部屋に戸棚があるだろう？その戸棚の下に鍵がある…その鍵を使って一番上の引き出しを開ける…その中に封筒が入っている…それを見れば全て分かるだろうからな』

この時の親父の声は何だか悲しげなものだった

父『じいちゃんちがあつたる？あそこは滅多に人が来ない…とりあえずはあそこで何とかしなさい……』

『どうこうことだよ！…わけわからぬよ！…一体何が…』

父『お前は生きる』

その時受話器の後ろから鈍い音がした

親父が持っていた受話器が落ちたのか激しい雜音がなり響き、その

あとからは数人の男の話声が聞こえたが聞き取れなかつた

男は電話がまだつながつてゐることに気付き、受話器をもどした

俺はただ呆然と立ち尽くし、頭の中を整理した

母『光……早く』の荷物を持って逃げなさい……』

俺はハツと我に帰つた

母は電話の内容が聞こえていたのか茶封筒をもつてゐる

快『なんで逃げる必要があるのよ?』

横にいる快は混乱していた

『快……麻由……お前らは小乃を連れて逃げひ……』

快『だからなんで……?』

『多分母さんが持つてる封筒に全部書いてある』

そのとき外から自転車のブレーキ音が聞こえた

拓海『光ちゃん!』

『拓海……ちょうどよかつた……裏庭にリヤカーがあるからこの三人を連れて逃げてくれ……じいちゃん家分かるだろ?』

拓海『わかつた！お前はどうすんだ？』

『すぐに行く』

拓海『了解。わざ行こう。麻由ちゃん、快ちゃん、あと、小乃ちゃんかな?』

いつの間にか俺の足にしがみついていた小乃はコクリと頷いた

母『はい！これ荷物！！絶対に帰つて来ちゃダメよ！――！良いわ  
ね！？』

快  
『叔母さん』

母『早くいきなさい！！私は大丈夫だから』

『海賊』をめぐる話

快達は折海に連れられししたやん家に向かつた折海の視点快達  
?光也どうしたの?』

招海。多分親父さんになにかあつたんだスミンな

快『じゃあ光也は……』

招海。多分病院に向かうたはすたよ。

快』でも危ないんじゃないの！？あの様子だとただ事じゃないわよ

! !

拓海『死にはしないから大丈夫だよ』

拓海は笑つて言った

快『なんでさつきからそんなに落ち着いてられるのよー?』

拓海『だつて光ちゃんがそいつの奴に負ける訳がないしね』

快『嘘!…あたしに腕折られたような貧弱なのよー?..』

拓海『その時まではね』

快『え?』

リヤカー自転車はカーブに差し掛かりスピードを落とした

拓海『その日から光ちゃんは強くなつたの』

快『どういう意味?』

拓海『まだ子供とはいえ同じ年の女の子に腕折られて入院するような我が子をそのままにはしないでしょ?..』

快『…………』

拓海『光ちゃんはそれから5年間みつちり親父さんに鍛えられたんだよ…恐らく影で危ない仕事をしてた親父さん流の拳法をね』

快『…なんであなたがそんなに詳しく知つてんのよ…』

拓海『ん？ああその修行の相手、俺だったからね』

母『父のことここへんだろ？』

玄関前で母は言った

『ああ……』

母『うつむいて来なさい』

『…』

母は自分の部屋に俺を呼んだ

『何だよ？』

なにも言わない

ただ無言で何かゴソゴソ『棚の中をかき回している

すると突然立ち上がり、今度はじいちゃんの仏壇がある部屋に誘導した

『何がしたいんだよ？』

母『そっちもちな

母はじいちゃんの仏壇の左側の取っ手を握っている…俺が持つのは右の取っ手と言つとか…

俺は言われるがまま握った

『どうすんだよ?』

母『せえので引くよ

』  
『?

母『せえのー』

勢いよく仏壇を引いた、すると仏壇はゴロゴロと音を立て、手前に外れたではないか

絶対じいちゃん怒つてる

仏壇のあとぼっかりと空いた空間の奥になにか見える…

すると母はその空間に入り何かしていた

力チャツと

鍵の開く音がした

金庫のようだ

母はその金庫から長い箱を取り出し、埃を手で払った

母『もつてきな

』  
『何だよこれ?』

俺はその箱をそつとあけてみた

薄く白い和紙に包まれたものを丁寧に開け、袋から出してみた

『……日本…刀?』

母『じいちゃんの形見だよ』白銀に輝く刃に漆黒の鞘の紛れもない  
日本刀だった

母『じいちゃんと父さんはあらかじめこの事態を予測していたみたい  
いでね…」いつなつたらあなたについてね…使えるだろ?』

『あ…あ…』

そうこうとか…

確かに女の子に負けたとはいえ幼い頃からの鍛えようは異常だった  
当時それが普通だと思つてた俺は氣にも止めなかつたが今考えれば  
凄いことだ

母『いくんだろ?』

『ああ…』

母『気を付けなよ』

『ああ…』

母『あんたもわかつてると思つたけど……もつぶつひじはなこと思つ

『……』

母『絶対にここに帰ってきておひしゃダメだからねーーあんたはあの子たちを守つて行かなきゃなんないんだからね』

『ああ……わかつてゐるよ』

母『じやあ行つて来なさいーーすき焼き作つて待つてゐるからね』

『…………ああーー..』

俺は家を飛び出した

母の顔は最後まで見ることができなかつたがだいたい想像がついた

…

ギア・50

俺はMAXスピードの自転車まだがりペダルを踏んだ…親父のもとに向かうため…快『おじいさんの家つて一体何処なのよ…』リヤカーに揺られながら快は聞いた

拓海『ん~たしかこの先の港から沖にまつすぐ行つた島だつたかな?』

快『し…しまあーー?』

拓海『島』

快『ビ…ビ…行けよ?』

拓海『ん~その辺のボート盗んでいくかな』

快『あんたなかなか悪いのね…』

拓海『だつてこの事態だよ? 良いも悪いもないっしょ?』

快『そうそう…さつきから聞きたかったんだけどさあ? あんた何で  
わざと家に来たわけ?』

拓海『そりゃあ逃げるためだよ』

快『逃げる?』

拓海『あれ? 聞いてないの?』

快『なにを?』

拓海『今の現状』

ちよつと港に着き、リヤカーから下りて話を聞いたとしたが、さつきから麻由と小乃が妙に静かだ。ふと目をやると一人は気持ち良さそうに眠つてやがる

快は色んな意味で尊敬の眼差しを送つた

快『麻由~ついたよ~』

小乃『ついた?』

快（おお小乃が先に起きた）

快『麻由ー』

麻由『うー……』

快『起きたね』

麻由『うえ……』

快（違ひ……酔つてゐる……）

麻由『快ちゃんあん……』

快『…なに？』

麻由『袋ない？』

快『すぐそこが海だからいつといで』

麻由『うあい……』

麻由はよろよろしながら海辺に行つた。そのつしりを小乃がおもしろそうに着いていったが、しばらくしてから青ざめて帰ってきた

快『お帰り』

小乃『小乃絶対お好み焼き食べない』

快『……忘れなさい』快『それで、あなたはなんで家に来たわけ？』

拓海『まあ簡単言えばそっちの家と同じ展開だつたよ』

快『じゃあ状況つてどうじよ? もつたいぶつてないで早く言  
いなさいよ、じれつたいわね』

拓海『わかつたからーそつ焦らないで』

快『…………ふう』

拓海『……とつあえず詳しい事はこの書類に書いてあると思つ』

拓海は親父の書類に指を差した

快『じゃあはやく見ましょ』

拓海『一応光ちゃんの持ち物だから光ちゃんが最初に見るべきだか  
らね、あとにじよつ』

快『まあそれもそうね』

拓海(まあこれは素直に受け入れたね…ダメだつたらどうしようか  
と思つた…)

快『とにかく今の現状をあんたが知つてる限りでいいから教えなさ  
いよ』

拓海『それより麻由ちゃん大丈夫?』

約10m離れたところで麻由は海にイケナイものをぶちまけていた

慣れたのか小乃はその様子をまじまじと見学し、時々気持ちの悪そうな顔をしていた

快『大丈夫よ、いつも車とかでもあんなだから』

拓海『ふうへん』

快『それで現状は?』

拓海『ああ……天上陛下が殺されたのは知ってるだろ?』

快『ええ』

拓海『殺した犯人……いや、殺した国は北超鮮だつてことは聞いてる?』

快『それは初耳ね』

拓海『おそらく日本は戦争に負ける』

快『その前に戦争してたのね』

拓海『まあ……ね……それはいいとして、拓海『負けた国は相手国に従わなければならぬ』

快『そりやあね』

拓海『おそらく今度はアミリカの時みたいには行かないだろうね、北超鮮の兵隊が来ることはもう分かりきってるし』

快『……』

拓海『必ず捕まる！』

快『……』

拓海『大人はもちろん働くけれど、女の子や俺と光ちゃんみたいな普通じゃない人間はどうなるかわかる？』

快『女の子はまともな扱いを受けるわけがないし、あんた達は殺されるでしょ？』

拓海『そうー物わかりがいいね』

快『ありがと…もう大体分かったわ…要するにその事態を予測したあんたの親と叔母さんはあたし達を逃して生き延びさせようとしたのね』

拓海『やつ…俺が分かるのはこれくらいかな』

快『多分…』

拓海『？』

快『お母さんも同じ事にすこし早く気付いて私たちをいつに行かせたのね…』

拓海『…………おやりくな』

そつしてこるうちに船の準備は整い、あとは俺を待つのみとなつた

時速250km

大体新幹線くらいのスピードを考えてもらうとわかりやすいと思つ

俺は病院までの最後の一直線をギア・MAXでぶつとばしていく真  
っ最中だつた

親父の病院は二階の真正面

俺は時速250kmのなかペダルを固定し思いきりハンドルを手前に  
引き寄せた

すると自転車の前輪は宙に浮き、ウイリー状態となつた

俺はそのままのスピードで病院前の駐車場にある斜面から飛び上が  
つた

超高速のまま空中に投げ出された自転車のそのスピードはやがて重  
力に操られ親父の病室の窓ガラスを突き破つた  
ガラスの破片が頬をかすり血が伝つた

すぐに先頭体制に入りうつと刀を腰にさし、周りを確認しようと見渡  
せば大変なことに気が付いた

親父は俺に電話をかけてきた、ところどころで親父が電話のある所こ  
こへいじとは明白だ

いじめでは馬鹿でもわかる。ガキでもわかる。

しかしいじからが問題だ、この三階は手術室や集中治療室があるた  
め、病室に電話がない…

つまり…

親父の病室は移動となり、別の階になつたと言つじただ

俺は全ての覚悟を決めて左にあるベッドを見た

…………おじこちゃんが大口あけて驚いている…………

かねとおじこちゃんの田代が虚ろになりだした

まあこーーーーー

『だめだ！おじいさん……死んじゃだめだ……困る……』

おじいさんは我に帰り血の氣を取り戻した

『……よかつた……大丈夫？おじいさん？』

おじいさん『……あんた誰じや？』

よし！大丈夫！

『じゃあ俺急ぐからおじいさんさよなら』

おじいさん『あい氣をつけてなあ

おじいさん……長生きしてくれよ……

おじいさん『ああ……待たれい兄ちゃん』

ん？

『すみません軽く急いでますんで……』

『おじこわん』はは？「RJの部屋の奴のことですか？』

！――！

『…………すみません……よく聞けませんでした……なんでもうついて？』

『おじこわん』の部屋にまだ電話がないのお……』

ドアノブに伸ばしていた手を離し振り返る。ドアには鍵がかかっているのに今気が付いたがもうどうでもいいことだった

『おじこわん』……』

『おじこわん』ん？なにかな糞餓鬼

『事情はよく知らないがその布団に隠した何かを見るかぎり敵だよな？知ってる事を洗こわらせてもらひ』

おじこわん『ほう……気付いておったか……そうかそうか……正解じゃ……もはや糞餓鬼の域を凌駕しておるな……嬉しい限りじゃ……言葉を改めよつ……楽しませて貰おつかな……』ワッパが

『御託はここ……親父について吐けぬといつまでも吐こしてもいい

おじいさん『コワッパがいきがりおつて……ジジイを舐めてもうつ  
ちゃあ困るわい……』

おじいさんはゆっくりとベッドから起き上がり、布団の中から得物を取り出した

おじいさん『わしの愛刀じゃ』

それは刀と言うよりむしろ金棒に近かった

おじいさん『この刀はな……普通叩き、鍛え、磨ぐはずの鉄をあえて磨がずにそのままにした物でな……ちと重いが威力は化物並みじゃ』

確かに……布団の中だからわからなかつたがこの刀……ぬりて150cmはある、そのうえ太い……ただならぬ威圧感が出ているが、それは刀のせいだけじゃないだろう……この老人……こんな大刀を樂々と右手一本でもっている

ただ者ではないことなど一目瞭然だ

おじいさん『そちらの刀はそれかな?』

俺の腰に下げる刀を指差し、老人は尋ねた

『ああ……まあ使るのは今日が初めてだがな……』

刀の鍔を親指でゅっくつと押し抜き、その刃を見せつける

おじいさん『ほう……刀の扱い方や仕草を見る限りただの武器を持つたコワツパじゃあないのう……』

『ちよいと複雑な環境で育ったからね……』

おじいさん『思い出すのう……若き頃のわしの全盛期を……ちよつどお前さん位の歳じやつた……』

俺と同じ位の歳といつと引つ掛かるが、おそらく昔アミリカと戦つていた頃だらう

おじいさん『さて……始めるとするかの』

『だな、お喋りが過ぎた……その続きをまた今度ゆっくつと聞かせてもらひたい……ただし……あんたが生きていたらな……』

おじいさん『コワツパに負けても困るんでな……いつも本気で行かせてもらひたい』老人は刀を両手で持ち、切つ先の延長線上に俺の眉間が来るような構えをとつた

『剣道形か……』

おじいさん『ああ……しかし……そちらのはあまり見ないな……自己流かな?……いや、殺人剣か?』

俺の構えは刀を片手で持ち、半身をいれ、延長線上が相手の膝下に来るような構えだ

『自然にできた構えでな……俺もよくは知らない』

おじいさん『まあ良い……ああ……先手は譲ろうつ……いつでも来なさい』

…』

『ああ……やつさせてもらうよ』

言葉を言い切るまえに俺は切りかかった

まずは相手の左目に向かい振り下ろすフェイントをいれ、そこから軌道をかえて右脇腹を狙う……これから反応で相手の力量を測るいわば様子見の技……さて……どう来るか?

おじいさん『……ふう』

なんと老人はフェイントを見抜き、あえて動かず右脇腹に振り下ろした刃を止め、そのまま刀に沿い俺の懷に一瞬で入つて來た

『……くつ……』

俺はとつさの出来事に戸惑い刀を引くがもう遅い。老人はすでに柄で俺のアバラ骨に一撃を加え、ゆっくりと身を引いていく

『……ガハツ！……』

呼吸が苦しい。息をするたびに激痛が体を駆け巡り、体力を奪う

『……ク……ソが！』

おじいさん『……つまらんな』

ゆっくりとまた同じ場所に戻った老人は呆れ果てた様子で呟いた

おじいさん『わたしは君を過大評価しそぎていたようだよ。残念だ

……骨まではいたつておらんから安心せい……』

確かにその様だ。さつきまでの激痛はすでに八割が治まり、また普通に呼吸が出来るようになっている

『やつらの一撃で決めれば良かつただろ?... ビックリ!』などだ。

おじいさん『コワッパが... 大層な口を叩くからどれほどの物かと思えば』の程度とはな... わしは樂しませりと言つたのだがの...』

『質問に答える... なぜ止めをさせなかつた?』

老人は咳払いをして呟いた

おじいさん『このまま終わつて何が楽しい? わしもあんたもじや戦いとは楽しむものじやろ? ちがうつか?』

『わあな... 色々なものがあるんじやないのか?』

おじいさん『そうにしたつて楽しければ損はないじやろう?... それに... わしにとつてもあんたにとつてもこれが最後の戦いかもしれぬ... ならば楽しむ... わづじやねつへ。』

驚いた..... この老人は死の覚悟を通り越していわゆるスリルを楽しんでいる....

命がけの戦いの中でその危機感を楽しむ……それは同時に自分の命を  
楽しさだけの為に燃やし尽くす……正に武士……何故だろう……そ  
の感覚は俺の中にも多かれ少なかれ存在するよつた気がする……

この戦いはお互いの意地と意地の勝負……取るか取られるか、そん  
な中にチマチマしたフェイントなどを入れた自分が恥ずかしい……  
とりあえず命の取り合いで遠慮はいらない、この危機感を楽しむの  
もあながち悪くはないさうだ……

『ひりひり謝罪しておひひ』

おじいちゃん『なにかな?』

『この戦いに小賢しい小細工を持ち込みすまなかつた……詫びに…  
この戦いを楽しむことに全力をつくそつ』

俺は刀の鞘をベッドに置き、こいつでも切りかかるるよつて構えな  
した

今度は相手を殺す為の構え……

まさに心が踊る……全身の筋肉に力が入る……身体中の全神経がこ  
の老人を殺す事だけに集中している……

おじこさん『ほう……ここ田だ……ならばわしもわれ相応のもじなしを  
せねばならぬな』

そつ言つたからには何か構えが変わるかと思つたら先ほどと同様の  
構えをとつてみせた…

しかし先ほどとは明らかに違つ物がある

殺氣と威圧感だ

まさに俺を殺すことだけを考えている……何故だろ？…この危機  
感を俺は楽しんでいる

心臓が爆発しそうなほど高鳴る

全身から汗が吹き出る

おやりくあちらもやうだらう……お互いのフルパワーがぶつかり合  
う……これほど楽しに事はない

どちらの力が上か、殺気が上か……間違ひなく勝負は一撃で決まる

…

今ならはつきりと言える……楽しい……間合いが少しずつ……しかし  
確實に近くなりやがて剣先が微かに触れる位の距離となつた

お互い一歩踏み出せば止めを刺せる位置……決着の時は近い

そんな時、突然の風でカーテンが一人の間に壁を作り、揺れた

やがて風は治まりカーテンがもとの位置にもどる…………その時だつたカーテンが戻った時にお互いの刀が重なつた

全力の力がぶつかり、その全ての力はこの一本の刀に注がれる

フルパワーの鍔競り合いとなり、あとはお互いの刀の耐久力を全てを賭けるしかない

全ての力を刀に込めて、俺は最後の力を振り絞り刀を押し込んだ

その時

俺の刀に亀裂が入つた……その亀裂は即座に我が刀身を砕き、刀は折れ、老人の刃が俺の左腕を直撃し、膝が地面に着いた……

止めを刺されるかと思い、とつさに立ち上がろうと手をつくが

『ぐああああああ……』

あまりの激痛に悲鳴を上げた

左腕の骨は見事に砕け、動かなくなっている

終わった……

そう思った刹那

俺の横に老人が血を流し、倒れた

状況が理解できないが立ち上がり、老人の姿を確認してみる

なんとその胸には折れた刀がはねかえり、深々と突き刺さっていた  
おじいさん『やられたわい』

『喋れるのか…』

素で死んでるかと思った……

おじいさん『ジジイを舐めるんじゃないわい。たかが刀が胸に刺さつた位で即死するほどやわじゃない』

『その様だな…』

おじいさん『まあじき死ぬがの』

『だらうつな』

この老人を殺した…と、言つより戦い、勝つたことに罪悪感はない  
…もともどどちらかが死ぬ戦いだった…

おじいさん『まあ死ぬ前に…小僧…腕を出してみる…』

俺は言われるがまま折れた左腕を出した

一応一瞬警戒はしたが、もとから折れた腕になにかするとも思えない

おじいさん『わしが死ぬ前に面白こもんを見せてやる』

そうこうと老人は折れていると思われる所に自分の手をあてた

『なにをする気だ?』

おじいちゃん『力を抜け……まあそつ固くなるな』

一応力を抜いてみた、すると老人の手がつらうらと光だし、赤黒く変色していた腕がまるまるうちに肌の色を取り戻していく

『……まさか……』

おじいちゃん『そのまさかじゃよ……』

俺の骨折が……治った……

おじいちゃん『どうひじや?』

手に力を入れてみると何の違和感もない……むしろ軽いくらいだ……

『なにをしたんだ?』

おじいちゃん『あんたも聞いたことへりこあるじやろ?・氣功じやよ』

『氣功ってあの漫画とかのか!?』

おじいさん『まあ光線何かは出たりせんが似たようなものじゃ』

少し期待した

『使えるんだな……本当に……』

おじいさん『まあ凡人にはむづじやがな』

『治療も出来るのか?』

おじいさん『当たり前じゃ、今して見せたじやない……それに普通背中に刀刺さつてるジジイが喋るものか!……』

ああ……そうこやあねうだ……

おじいさん『多分あんたもできるだい』

『……本当に……』

おじいさん『現こやつの一撃でやつとげたじやねん』

』……『

おじこわん『…………やせつ氣付いておひぬか…』

二つだ？二つ俺が…………つか顔色をうかがうやバニダ爺さん…

おじこわん『折れた刀があんなに都合よく突き刺されると困つか…』

『…………』

おじこわん『あれが氣功じやよ』

『どうすれば使いこなせる…？』

おじこわん『そつ焦るな…と、言いたい所じやがそろそろわしもヤバいんでな…手短に説明するが』

急いでくれ……本当に死にそうな顔色になってしまった……不謹慎だが頼む……

おじこわん『まづ氣功は己の精神エネルギーから来ておる、全てに

対する欲が力の源じゃ……あとせやの力をピリコントロールするかで  
全てがきまる……』

よしー！わかつた！不謹慎だから口に出せないが死ぬ前に説明して  
くれてありがと！」

それはそりと……

『最後に教えてくれ……』

おじいさん『なにかな？』

『親父は……親父は生きているのか……？』

おじいさん『…………そのことが…………この病室のあなたの親父さんは……』  
おじいさん『…………生きとる』

全身の汗が引いた……  
安心感が身体中を駆け巡る

おじこれん『しかしあいつ』の病院内こまおじこ……』

『…………そつか』

おじいちゃん『アヤツは重要人物じゃ、やう騒々と殺しちゃせんが、あんたに邪魔されるのは少々厄介じゃからな…わしはあんたの足止めじゃつたんぢや…』

『…………』

正直そんなことせびりでもよかつた…  
親父が無事ならそれでいい…

おじいちゃん『もひへ……時間のよひじや…

『…………』

おじいちゃん『少々喋りすぎた…』

『残り少ない命を…悪かった…』

おじいちゃん『いいんぢや…未来ある若者に全てを託してなんの悔いもない…』

『…………』

おじいさん『最後によいか?』

『なんだ?』

おじいさん『この刀……わしの愛刀を使つてくれ……あんたの刀は折  
れてしまつたじゃろ……』

『大事に使わせてもらひ!』

おじいさん『そしてこれじゃ』

老人は懐から何かを取り出した

おじいさん『このベッドに落ちていた物じゃ……おそらくあなたの  
親父さんのものじゃろう!』

それは間違いなく親父の金のネックレスだった  
いつも肌身離さず身につけていたが相当のもみ合いになつたのだろう  
鎖がひきちぎれている

『やうだ……ありがと!』

おじいさん『.....』

礼を言つた時にはすでに老人はこの世を去つていた快『おっそいわ  
ね.....』

麻由『そー...ね』

快『あんた大丈夫なの!-?』

麻由『うん...もう何もかも出したみたい...』

小乃是麻由の出したものが魚に食われていくのを見て素で引いている

快『.....あいつも大丈夫かな?』

拓海『.....どうも遅いね』

快『あたし行つてくる！…』

拓海『場所は？』

快『あ……』

拓海はふうつとため息をつき

拓海『俺が行くからちょっとここで大人しくしてね』

快『あたしもいくわよ』

拓海『だあめ！死ぬかもしないよ？』

快『行く！…』

拓海『じゃああとの二人はどうすんの？』

快『それは……』

拓海『だからこそ快ちゃんには『ここに来てもりわないと困る』

快はどこか不満げだ

快『……わかったわよ…』

拓海『じゃあこれ貸すから』

拓海は学ランの内ポケットからナイフを取り出した

快『ナイフ?』

拓海『刃は触っちゃ絶対ダメだよ』

快『わ…わかってるわよそんなこと…』

拓海『毒、塗つてあるから』

快『うわっーーー』

拓海『一撃必殺だから氣を付けてね』

快『わ…わかつた…』

『さて…どうしたものか…』

老人の遺体が静かに眠るなか、俺は焦っていた

正直このあとの行動を考えてなかつた…よくよく考えてみれば一人の『ご老人を殺したんだよな…やつちやつたなあ…』

俺からすれば

『親父を連れ去った組織の一人と戦い勝つた』

だけど世間からすれば

『今日の昼頃都内の病院に入院中の老人が日本刀で何者かによつて殺害されました』

だもんなあ…何とかなんないかなあ…

とりあえず病院から逃げ出そう、これだけの騒ぎで人が来ないはずもな…い?

俺が窓をぶち破つてからゆうに30分はたつている

それにも関わらずだれもこない

おかしい……しかしこれは好都合逃げをせてもうつだけだ

俺は自転車に乗り、病室から外に出たが、やはり入っ子一人いない

とりあえず階段を降りてもっと病室の多い二階にこつて見ることとした

自転車で階段を降るのはすこしだるいがこの自転車なら難なく降りられる

勢いよく一階に降りてきたがやはり誰もいな……いや、違つ

よく見ると壁や床に大量の血痕がある…

誰かがこの病院で戦闘でもしていたか？

不安要素が沢山残るけれども大部屋を見てみる事にした

二階の一一番人が多い部屋だ、だれかいるかもしない

俺は自転車を飛ばし、ナースステーションを通り越して大部屋へと向かつた

すると大部屋の方からわずかに人の気配がする……

俺はほつと一息つき、足を早めた

しかし

大部屋には人はいなかつた……

そのかわりに人だつたものが無造作に散乱し、部屋を赤一色に染めていた地獄絵図

この言葉が適応するにふさわしい光景だ……

軽く100～200人の死体がある……

服装の違いから見てこの病院内の全ての患者や医者、見舞人の死体がここに集められている……

『一体誰が……………』

この病院内にそんなことが出来るのは一人しかいない！！

俺は背中に背負つた大剣を見た

しかし刀の刃には血の後すらついていない、柄に巻かれた白い包帯も老人の手垢の汚れ位でとてもこの人数を殺害したとは思えない……第一老人の服に帰り血は少しも見られなかつたし、この刀は切れないじやないか

したがつてあの老人じやない…………と、すると

この病院内にまだ誰かいると言つことになる……この人数を殺したとなると個人じやない……複数だ

氣功で腕が治つたとはいえこの体力で鉢合せになれば間違いなくあの世逝き…………か

……冗談じやねえ逃げろ…………

この体力でそんな奴らに敵うはずはない、逃げなきや死ぬ…………

俺は病院内を自転車で駆け巡り一階へ繋がる階段を探した

探している途中もどこかに人がいないか気が気ではない

やつと階段を見つけ、降りると言つよりも飛び感じで爆走していた  
階段を降りてしまえば後は楽、広い受付ロビーから正面玄関までフルスピードで行けば良いだけだ

しかし

最悪の事態は訪れた…

自動ドアの正面に一人、誰かがいる

そいつは看護婦でも医者でもない、それは確かだつた

体を押し潰すような威圧感、あの老人と全く同じ種類の殺氣を放つ  
ている

この状況で俺に出来ることは一つ、フルスピードで降りきるまでだ

俺はギアを50にセッティングし、全力でペダルをこいだ

時速250kmでぶつかればいくらなんでもただ事じゃない、ドアをぶち破るのは少々キツいがそんなことは言つてられない

あと10m…俺は全ての力をペダルに注いだ

その時、俺のスピードがいきなり鈍った…と、言つぱり止まつた

近い

どうこうことだ?

足下に異常が発生したかと思いふと下を見る

そこで信じられないことに気付いた

滴り落ちた俺の汗が床に浮いている

その時ようやく気が付いた…止まつたのは自転車ではなく、俺の時間に対する感覚だ

昔テレビで見たことがある、人が窮地に達すると体内からアドレナ

リンを大量に分泌して全てをスローモーションに見せると

正にその現象だった

おそれりくわの原因は正面の敵、覚悟を決めゆつべつと確認する

俺は即座にブレーキをかけた

行動どうこうの問題では無かつた、前に立ち塞がる敵の田は人間の  
それではない、かといって獰猛な猛獸なんてレベルでもない、しか  
しそんな事はどうでもいい……何よりも俺は……俺はこいつを知つ  
ている……

時間の流れも正常になり、急ブレーキで止まった

震えが止まらない……

俺はもう一度覚悟を決め、改めて対峙した

『なにしてんだ……ソレで……』

玉木瑠璃『水沢君こそなにしてるの?』んなとひひで?』

誤算だつた

今の状況で逃げるには「武器を持った大人数の敵」のほうがはるかに楽だったのに……

大人数の場合フルスピードでぶち抜けば何とかなるが、単独の敵となると話は違う……間違いなく先ほどの老人レベルの敵が来るか、それ以上の奴しか来ない

まずい……今の俺の体力じゃ老人に勝つどころかそれ以下の奴にすら殺されかねない

絶対絶命……つてやつだ……

『……おい』

どこから聞こえる声がした

『?』

『おこーーー』

『……………?』

『「ワッパーーーー』』

『お……お嬢ちゃんの糞ジジーー? ミーだー?』

瑠璃『……なに言つてゐるの?』

『頭悪いのを「ワッパーーーー」背中じや背中』

『せ……背中あ?』

背中と言えば大刀しかない……

瑠璃『だから何なのよ……疲れる……』

『なんじゃ分からんのか……』

『…………刀?』

瑠璃『なにがよ?』

『やかましご……ちよつと黙つとけ……』

瑠璃『……』

すねた……それそれでねえ

『あんた何がビリになつてんだ?』

『簡単な事じや、死ぬ間際に全ての氣を刀に定着させただけじや』

『馬鹿があんたは』

『なに?..』

『やべなこと出来ゆやつがこゐとゆいのか?..』

『まあ……お前さんかお前さんの親父さん位かの』

.....

『無理』

『無理なもんかい！お前さん似たよつなやり方でワシを殺したん  
じゃやーーーの糞餓鬼がー』

『そんとせせそんときだらひがーの糞ジジイーーあんまふざけてる  
と溶かして別の武器にしてしまひがー。』

『なつ…………「ワッパが、騙されるヒドモ御つたかー！そんな技術が  
お前みたいな糞餓鬼に有るわけ無かるつがー！生きとの年数が違うわ  
い』

『残念でしたあー！俺は昔からやたらヒ変な修行やられてたからで  
きますうー！作れますうー』

『あつーーーの糞ジジイやつこひーとせ早く言こやがれ恥ずかしい  
らんから独り言みたいじゃや』

『なつーーーの糞ジジイやつこひーとせ早く言こやがれ恥ずかしい  
ーーー』

『やひ独り』

じへった…

『ベツアザマニコダム…?』

無意識に小言になる

『ワシせぬ誰かの心に詰つかけとる、やひも心の中で返せばよ  
い』

『ああな……あれ?..』

一つの疑問が生まれた

『じやあせつあはなんで俺にアツサツ出し抜かれたんだ? その言  
様だと考えてる事なんかも分かるんじやないのか?』

『なんじや……ひまつ頭悪このつ』

腹立つなしのジジイ……あいれかーなるモビー・

『わかったーつまりあなたに語りかけようとした意思で言葉を返せば伝わるってことか』

《やつと分かったか》

『つまり手紙を出した返事を手紙で出して答えるみたいな感じか』

《その通りじゃーメールの返信みたいな物じゃの》

(…）の糞ジギイ人がせっかく分かりやすいように手紙って書いてやれば思いつきり横文字使いやがって…胸糞わりい…)

《なんじゅう?》

(よし伝わったーこんな感じだな)

《……まあそんなもんじゅ》（んで、どうすればいい?）

《相手はあやつか…》

老人はやけに静かな返事を返した

(知り合いか?)

『いや、実際に会った事はないがあやつは恐い…』

老人は言葉を詰まらせた

(なんだよもつたいぶつて)

『何と言えば良いか…まあ簡単に言えば人造人間じゃな』

(はあ！？)

俺は驚きを隠せなかつた

(人造人間つ…俺のクラスメイトだぞ！？)

『知らんわいそんなこと…この任務の前にリストを見たんじや！間違いないわい！

(勝てるのかよ…)

『無理じゃな』

(だよな、自分でもわかる…)

そこで痺れをきらしたのか玉木は重い口を開いた

玉木『もついい?』

いかにも苛立つて いる声色だった

『一応聞くがこの病院の人間全員を殺したのはお前か?』

玉木はふうっと一つため息をついて面倒くさそうに答えた

玉木『あたしはそんなにグロテスクな性格していないわよ』

以外な答えだった

『じゃあ誰がやった?』

(一応聞くがお前じゃないよな?)

『馬鹿かお前は一ワシがそんな面白くないことをするわけがなかろう!』

(だよな)

とりあえずは老人ではないことがわかった

玉木『ん~あたしの同類かなんかかなあ……』

同類？

『人造人間のか？』  
玉木『あれ？ 知つてたの？』

……あ

『.....』

『馬鹿もんが…頭悪いのあ…』

(どひしょ…)

しへりつたああ…

玉木『どこのから情報が漏れたの？』

まづこ…

(どひしょ…)

『じょうがな…正直に言ひわけ、何とかなるじやない？』

(何とかなるつたつて…)

『もとは自分でまいた種じや、自分で刈り取るんじやな』

面倒なことになつた

玉木『とつあえずビ』で情報を仕入れたかいいなさいよ

俺は腹を決めた

『あ…あのジジイに止めを刺す寸前に聞き出したんだよ』

玉木『ジジイって…あああいつね、あのバカでかい刀使つてたやつ  
ね』

『……』

玉木『あのジジイ…まあいいわ、あんまり秘密にしておく理由もないし…』

玉木はつまく騙されてくれた

(よかつたあ)

『ヒヤヒヤしたわい…』

( まことだよ… )

玉木『それはそうと… そろそろ仕事したいんだけど…』

玉木は面倒くさがりに言った

『仕事つてこいつ…』

思わず声が震える

それもそのはずだ、次の玉木の回答に俺の命がかかっているとなると震えるはずだ

玉木『そうね…』の病院内の生存状況の確認と、見回つてといふ  
ね

『よかつたのう、皮一枚で踏み止まれて』

全身の汗が一気に引いていくを感じた

( ふう…全くだ )

玉木『最後に危険分子の掃除つて所ね』

汗復活！－！

『……』

(……)

ビリヒョウヘ…

(ビリヒョウヘ…)

『わしに聞くな』

(俺…死ぬのかな?)

『馬鹿もん！貴様は危険なのか？よく考えてみい、奴が掃除するの  
は危険分子じや！なにも貴様を殺すなどといつとらんじやうつ』

(そ…そうだよな…俺は危険じゃないもんなー…そうだよ…なに自分  
を過大評価してんだよ…恥ずかしい)

『なら大丈夫だな、この病院には危険分子ビリウかもう誰もいなか

つたぜ』

玉木『あら、なにいってるの?あなたがこるじやない』

チクシヨオオオオオ

『あひやー…』

(ビリヒヨウ…俺危険分子だつた…)

『やるしかないかの?…』

(やぬつたつて俺怪我だらけだぜ?)

『それはワシにも責任があるの?』

玉木『そういうわけで水沢君をよなうり』

『よんなうりって…』

そういうかけた刹那水沢は殴りかかってきた

『おわつー』

しかしその拳には大した威力もなく…といつても一般人に比べれば物凄い威力だが、とにかく大した事のなく、折れて刀の鞘で樂々防いだ

(おりよ?)

『?』

(だ…大丈夫かもな…)

『妙じやな…』

(だよな)

『小僧、油断するでないぞ…あやつ…何かある』とは確かじや

(あ…分かつてゐる)

俺は折れているが刀を抜き、構えた

『何をしておる?そんなナマクラで敵う相手じゃ無いじゃろうー。ワシを使わんか』

(こんな重いの使えるか!)

『氣でなんとかせい』

(氣で?)

『ワシとてこんな大刀を振り回すほどの力はない…じゃから刀に気を込め、体の一分としたんじや』

体の一分…

(ど…どうやって?)

『刀に意識を集中せい! 刀を振り回したいという欲を込めるんじや』

欲を込める…

(わ…わかった)

俺は刀をおさめ背中に背負つた大刀を引き抜いた

玉木『?』

大刀に意識を込める…

この大刀を自分の体にするイメージをした

イメージの中には自由自在に大刀を振り回す自分が思い浮かぶ…

体の力が大刀に注ぎ込まれるのがわかり、異変があきた〜ここで拓海くんのキャラクター紹介♪

皆さんが気になつているキャラクターの紹介を俺、拓海が行いま〜す

じゃあ今回は俺が個人的に興味があるこのお方から

水沢小乃

九才、小学生三年生で身長は平均以下、体重も平均以下都内の小学校に通う予定だったが、本人の引越しでの疲労や、体調不良で来週から登校予定（まあ今となつては関係ないが…）姉、快と違つて虫が大丈夫、特技は魚をさばくこと、得意料理は刺身、生け造り

ん〜俺的にはちつさくて人懐っこくて好きだね

でも小学三年生だったんだ…幼稚園かと思つてた…

まあ総合評価Aつてとこかな

んじゃ、また凄いタイミングで来るんでしょうね~

一言に異変と言つても色々ある。それは大きく分けて一種類

姿形が変わる視覚的变化と、内部の性能、または能力が変わる内部的変化だ

今の状況を説明するなら後者の方が正しいと言える

老人の言つとうり刀に全く重さを感じない

軽く動かしてみて再度認識できたがほとんど体の一分のよつに動く

『…まじかよ』

俺の中で確かに力を感じた

これが……気

『おい』

玉木『ん?どうした?』

『あなた、死ぬよ』

俺は一気に玉木の懷に飛び込んだ

玉木『……なー?』

玉木は一〇三はある距離をほどどビ一瞬で行ける

自分で自分に驚いた

使ってみてわかつたがようは刀と同じ要領だ

刀に意識を集中して気を産み出したように、足に意識を集中し一気に蹴りだすことでのスピードがつむこと出来る

玉木『……へつ』

玉木はいきなり接近してきた俺を横に交わすように距離を取った

玉木『……つはあ……はあ……』

『すいぶん息が上がってるな』

玉木『……ふう…氣のせいじゃないかしら』

素早く息を整え、いつもどおりに戻していく

『お前、武器は使わないのか?』

玉木『そうね…氣功まで使われたらもう丸腰つて訳にはいかないわ  
ね…』

玉木は制服ブレザーの内ポケットから一つの獲物を取り出し、それを本来の大きさへ組み立てた

『へえ…トンファーか、珍しいな』

玉木『まあね』

『でもそれだけじゃねえだろ、勿体ぶつてないでだせよ』

玉木『あ、やっぱり氣付いてたんだ』

『まあな』

最初に見せた殺氣をあんな力とトンファーの存在で出せる筈がない  
恐らく一番恐るべき力、そして内部的変化形の力だと予想される

玉木『まあ…あるにはあるけど水沢君にはこれで十分だしね』

『なに?』

玉木『水沢君位ならトンファーだけで事足りるってこと』

『……』

このあま…

玉木『気の使い方まだよく分かつてないしね』

『当たり前だ今までこんな力知りもしなかったからな』

そういうと玉木はトンファーを軽く振つて準備運動じみた素振りを  
とり始めた

それだけで俺は一瞬体が凍り付き息づかいが荒くなる

玉木『やつ言つ割にはいい動きしてたじやない上出来上出来

なぜだらり……こいつの言ごどせに元氣とか違和感を感じる

玉木『まるで自信ありつて言つのが見え見えの素人っぽい……いや、ガキっぽい動きだったね』

これだ……この口調

俺が知っている玉木瑠璃とは根本的に違う

あいつはこんな人を逆撫であるような喋りかたをしない

もつといつ……静かな……何というかな……

『お前そんな喋り方だったか?』

玉木『なにが?』

意表をついたかのよつコーンファーの動きが止まった

『お前いつも学校でそんなキャラだったか?』

玉木は動揺を隠せていない、まだこの先になにがある

玉木『はあ? どうでもいいでしょ そんなこと一言葉遣いなんて  
簡単に変えられるわよ! ……』

やつぱりなにかあるみたいだ

『田付きまでか?』

玉木『はあ! ? 田付き? なにあなた! ? なにが言いたいの! ?』

玉木の動揺は臨界を超えてはや暴走しそうだ

『それだけじゃない、仕草や立ち振る舞い、背筋まで全てが俺の知  
つている玉木瑠璃じゃない、誰だ? お前』

この言葉を境に玉木の様子が変わった

驚くほど大きく響く声を発したあと、玉木はトンファーの持ち手のキヤップを開け一粒のカプセルを取り出し、同時にある程度の落ち着きを取り戻した

玉木『あんたやつぱり大つつ嫌い！いいわよ、教えてあげるわ』

そういう瞬間彼女の身に恐らく本人にしか分からない異変が起こった

玉木 ぐつ

彼女の表情は驚きのものとなり、やがて自然さを取り戻していく。

玉木『…………はあ…………はあ…………はあ…………』

『どうかしたか？』

呼吸を整え落ち着きを取り戻した彼女はしばらく黙った後答えた

玉木『別に何でもないわ、今までのことも忘れない。……まあい  
いわ、どうせ殺すんだし』

いちいち口に触る口調を取り出した彼女はひどく疲れたように見えた

『やつか……』

『小僧!』

(ん?)

『何者かがここに向かってきている……この気はかなりの曲者と  
みえるわい』

(本当にか……くそ……まづい)

いまこの状態で増援が来たら間違いない俺は死ぬ

『それにしても速いわい…時速で三つと軽く100kmはまではあるんでは無からうか…』

(……………そいつって何か乗り物に乗ってるか！？)

『……………いや、乗つてあるー小そこが…車と見えたる』

希望が見えた

(せうか…ならきっと大丈夫だ)

今の俺は安堵に満ち溢れた顔をしていただろう

こんな状況なのに上を向き笑っていた

まるで氣を使わずに体が軽くなるような気持ちだった

『……ばつ馬鹿！小僧！…』

『ん？』

老人の声で我に戻り前に向き直したところで腹部に違和感を感じた

『……う……ぐはっ……』

(……おい……溝内になにか……ぶつけられたか…?)

返信を待たずに敵の姿を確認したがまるで動いた様子はない

『闘いの最中に気を抜く馬鹿がどこにあるかい!』

(でも……あいつ何したんだよ)

『ワシに分かるわけ無からうが』

(えー…)

『ほれ、来るぞい』

(あ、ああ…)

玉木はトンファーをぐるぐる回しながら俺の様子を伺っていた

『おこ、今セツキなにを…』

言葉の最中にトンファーの動きが止まり俺のセリフも止まった

玉木はトンファーをその場で引き、思にきつ突き出した

さつきは見なかつたその動きに、何かがくると直感し俺の体は横に飛んで避けようとした

が体はさつきと全く同じ何かによつて真後ろに吹き飛ばされた  
いた

『……つかが』

何がなんだか分からぬ

一体あのトンファーから何がでた！？まるでジェット機のエンジンの真後ろに居たような衝撃だった

とりあえず立ち上がった俺は完全に混乱していた

( なにがなんだか訳わかんねえよ！なんなんだあれー？ )

『わからん…とりあえず『氣』を使っているのは確かじやな』

( でも『氣』で飛ばしたり出来ないんだろー？ )

『焦るでない落ち着け！－』

( 落ち着けって言われても…… )

『とつあえず敵を見ろー・全てはそこにあるはずじゃ』

敵を…見る…

やはり玉木はトンファーをぐるぐる回しながら俺の様子を伺っていた

『…………』

トンファーの動きが…

止まつた

その瞬間俺の左肩に衝撃が走った

ほぼ関節が外れる寸前まで追いやられ、腰に差していた刀が真後ろへ吹っ飛んだ

『……………つ

『大丈夫か?』

返事をすることができない

肩の衝撃は一気に全身を駆け巡り汗が体をまとつ

(……ああ)

とは言つても正直無理だ

もつ息が出来ない…

どんな事があると俺はここで死ぬ

体はもう動かないし目が霞む…

次にあのトンファーが止まつたら俺はもう耐えられないだろうな…

でも…

この俺をここまでコケにした奴を活かしておいていいのか?

あろうことかこの俺に力半分で来ている奴を活かしておいていいわけがない

なら結論はこうだ

俺があいつを痛ぶつて、ひれ伏して、叩きのめす…

なあ…

それだけだ、簡単じゃないか相変わらずトンファーは回っている

「うひうひ…

いますぐ息の根ごとに止めてやる

『おこい小僧…お前なにある氣…』

(「ぬせえーー黙つてろ糞ジジイ」)

俺は老人を黙らせたあと次はあのトンファーを黙らせる事にした

動かない左腕なんて関係ない、右腕が残つていれば十分だ

玉木『あら、ずいぶんいかつい顔になつたじゃない』

俺は答えない

ここには俺に殺される、なら答えたところで意味などない

玉木は怪訝な顔をしてトンファーの動きを止めた

そこから出てくる物のトリックなりもつ解ける

玉木はソレを打ち出した。きっと奴の予想はこうだろ？…腹部にソレが食い込んで俺が膝をついた…そして一回田に見せたどでかいのを終わらせる…ってなかんじだ

奴はイメージ道理にソレを打ち出した

『……っ…笑わせる』

玉木の予想は外れた

打ち出したソレは俺の腹部に食い込んむ筈だった

しかしソレは書き消された

位置、距離、タイミング全てにおいて狂いはなかつた筈

狂いがあったのは俺の方、打ち込まれたソレは大刀のしおぎにようして防がれていた

玉木『…………つ……なんで…?』

見るに絶える…

先ほどまで余裕の塊のような顔をしていた奴が今や立派な馬鹿面になつてゐる

『……なんで……だと?』

玉木の顔色が悪くなる

『馬鹿かお前?そんな同じ技を何回も何回も繰り返されて通じるとでも思つてたのか?馬ああ鹿』

玉木の表情に険しさがこじみ出る

玉木『…………でもさつきまで全く見えて無かつたのに軌道まで的確に

…』

『ああ？やつぱり馬鹿だなお前、最初に俺が来たときのこと忘れたのかよ？』

玉木は首をかしげて更に怪訝な顔をしたあと、異変に気付いた

玉木『…………もしかして…見えてるの？』

『ああ！丸見えだよ！！俺は何かとすぐにアドレナリンが出てな、時々スローモーション状態になるんだよ』

玉木『確かに最初の超高速の中でいきなり急ブレーキをかけられる訳がない…その言いぐさだと最初から全部見えてたのね』

確かに…俺は最後の一撃の前に初めて自分の意思でスローモーション状態になつた

そしてからうじて見えたトンファーの角度から当たる角度を見つけて一瞬身を引いた

もしこれが出来なかつたら肩は外れていた

玉木『でも…』

トンファーが止まり、玉木は体をひねつて大きくモーションを取つた

玉木『避けられないくらい大きければ何の問題もないわよね?』

玉木は特大のソレを打ち出した

ソレが自分を巻き込んで吹つ飛ばす前に

俺はその塊を叩き切つた

俺の後ろ左右が弾けとぶ

玉木『……なんで…』

『馬あ鹿が…そんなもんでこの俺を倒せるとでも思ったのか?』

玉木の額から汗が落ちる

『所詮そんなんもの……空氣の塊でしかないだらつ』

玉木『……』

『体の中の氣を一気に腕に集中させて田の前の空氣を一気に弾き飛ばす……ソレの正体なんてそんなもんだろ』

玉木『…………くつ……』

『もつお前の相手は飽きた、ちゃんと言つたよな？死ぬぞつて』

俺は右腕と足に氣を集中させて地面を蹴つた

一気に距離を詰め、刀を振り下ろす

玉木はトンファーで防ぎに入つたがもう遅い、トンファーごと左腕を吊き折つた

からん……と、乾いた音をたてて鉄屑が床に落ちた

しかしその後に鮮血はない

大刀は肉を一切傷付けず骨だけを碎いた

玉木『つ……ああ……！』

玉木の顔が苦痛に歪む

俺は殺したつもりだった

理想の中じやすでに玉木は床に倒れていて血の海に俺がたたずんで  
いる筈だつたが……

『つたく……邪魔すんなよ』

入口には自転車が一台

『拓海』

拓海『ひどい言いぐせじやないか、邪魔なんかしてないよ』

拓海は明るく笑い飛ばして言った、確かに拓海は手を出していない

し止める呑み口元を出してもいいな

『気が散つたんだよ』

そう言いながら玉木の腕に食い込んだ大刀を引き離し肩に担いだ  
拓海『それにしても…お前がそこまで怒るなんて珍しいじゃないか  
?』

『やつか?普通だぞ』

拓海『嘘をつけ!眉間にシワがよつてるや』

普通とは言つたものの正直普通の精神状態じゃないことぐらい自分でわかつてゐる

そして何より俺の発した言葉に玉木がツッコミたそんな顔をしている、その表情こそが普通とかけ離れたことを物語つていた

拓海『しかし本当に珍しいな、お前がそこまでやるとはな…』

玉木が顔をしかめた

拓海『確かに昔ドッジボールで顔面一発連続で当たられたとき以来か

『やがましい！場を読め場を！』

拓海『確かに…』

『ああ…玉木の事も何とかしなきゃならないし…』

拓海『そっちじゃないよ』

場に一瞬沈黙が走る

拓海『玉木さんならわかってるよね』

玉木はいきなり振られて少々戸惑つたがすぐに解説をはじめた

玉木『鋭いわね、水沢君とは大違い』

一発殴つてやるうつかと思い拳を握り締めたが、そこで膝が折れ地面についた、もう限界だ

玉木『……私の肉体危険信号が働いたから多分いま援軍が来てるはずよ』

拓海『だらうね、ここに来る途中大通りの方から交通事故らしい騒ぎが何回も聞こえたしね』

玉木『はやく逃げなさい』

妙に暗い声だった

拓海『あんた、自分の立場わかつてる?』

と、拓海は腰の後ろから一本の幅広い剣、双剣をとりだした

拓海『いま俺があんたを殺して行つても構わないんだよ?』

拓海の言葉に玉木が反論する

玉木『確かに私には選択権がないかもしないけど……水沢君にはあ

るんじゃない?』

俺は無言で玉木を睨み付けた

玉木『だつて本氣を出せない女の子にそれまでボロボロされてるんだよ?』

拓海が早い動きで刃を玉木の首筋につける

拓海『俺たちは今お前を殺して行つても構わないと言つたよな? 時間的にも問題はないよ』

『やめろ』

拓海が驚いた顔で振り返った

拓海『光也?』

『心配すんな拓海、この俺ともあらう者がなかなか怒っちゃつてから大丈夫だ』

拓海『まあいいや命拾いしたことで、大切にしちゃなよ』

玉木『そつするわ』

拓海はそのまま自分のチャリに手をかけた

拓海『行くぞ、光也』

『ああ』

俺はすぐそばにあつたチャリを取り、拓海と二人すぐさま「じぎだじた

最後に一度振り向き、玉木を見た

それに気が付いたのか玉木は見たことのない笑顔を向け手を振つてきた

嫌味を込めて手を振り返そうかと思つたが…………やめた

さて……どうしたものか

やつぱり俺は大変な奴に喧嘩を売つてしまつたと見える

そう、玉木の振つていた手は俺が奴のトンファーボーと叩き折つた腕だった

バラバラになつた正面の自動ドアを超えて俺は向き直したが後ろからまたあの空氣砲が飛んでくる恐怖が襲い、もう一度振り返つた

しかし、もう玉木の姿は無かつた  
拓海『とりあえず逃げるよな?』

拓海が聞く

『あたぼーゆ』

# 俺が答える

! ! !

軽く百を超えた自転車兵士たちが俺と拓海の後を追つて、国道をぶつ飛ばしていた

『なあ、高校生一人相手に大人気ないよな?』

拓海『あんまりだよこの人数は』

しかし最初に比べれば少し減つたと見える

実力のついでいかない低級ライダーは『』がスピードに足が絡まり地面にひれ伏すことになるからだ

拓海『よし……』

拓海が腹を決めた

『次の角だな』

そう、この場を上手く切り抜けるにはある一つの方法しかないのだ

ここで作戦を簡単に説明しよう

まず細い脇道に俺たち一人が入つて奴らを事故らせる

まさに作戦の鏡のような完璧かつなんのリスクも無いように聞こえるこの作戦…しかし誰もが予想しなかった…いや、できなかつた誤算…そう、思わぬ落とし穴はある

残念な事にその落とし穴の原因は全て俺の…いや、俺の自転車にあるのだった

今までこの自転車は時速250kmをだし、階段を利用してあり得ない大ジャンプをするなど、自転車離れした神業を成し遂げてきた

しかしそんな神業にリスクがつかない訳が無かつたのだ

俺の自転車には……ブレーキがない

この自転車はもともと普通のママチャリを俺が完全改造して、その姿は警察に見られたら確実に没収物の違法ブツチギリの技物になつていた

ギアを50段階にまでつり上げ、自転車には決して不可能な250kmの超高速に仕上げ、その溢れんばかりのパワーに耐えるべくすべてのパーツを型どり、超合金でコーティングし、ついでに折り畳

めのよつて改造した

しかしここにある問題が発生したことでもう気が付いただろつか？

そう、ブレーキだ！ 250kmに耐えられるブレーキは自転車に付けられる訳がない！

そこで俺は悩んだぞ……それから三晩……

この問題を解決するにあたって悩んだ俺はふと近所の河原に散歩にてた

夏の風に吹かれたからか、少しばかり心が軽くなつたような気がする

いい気分のなか足元に転がる小石を手にとり投げてみた

石は水面を五回ほど跳ね、草むらに飛び込んだ

すると、石に驚いたのか中から一匹のテナガエビが姿を表した

『はまつー悪いことをしたなあ……』

その直後、草むらの中から30センチ程の黒っぽい影が現れてテナガエビはひと飲みにされてしまった

黒っぽい影はゆっくりと味わい、また草むらに戻つていった

『…………』

まあいいや

今度はあつけの木陰に行ってみよつー暑いから少し休みたい

すると、俺の図上をなにか早いものが通過した

『なんだ?』

と、思いつつ姿を追つと、なんのへんてつも無いただのアブラザミだった

『なんだアブラザミか……』

そう、この瞬間だった

『ちよっとまでよーー』のアブラザ///テナガエビーにか引っ掛かる…』

激しい違和感、もじかしさが俺を襲つ

『…………やうが…』

雲が弾けとんだ

『「」の「」ブレーキなんてない！いや、必要なかつたんだ！！そ  
うか……そつだつたのか…！』

これが俺の自転車の新システム、「ノンブレーキシステム」の完成  
の瞬間だつた

後の話になるがこの発見が元になり、拓海の自転車に「オートブレ  
ーキングシステム」が搭載された、それが今の拓海の自転車だ

『拓海イイー！いまだあーー』

拓海がハンドルごと全体重をつけながら細い脇道を直角に曲がる

するはどうだろ？… 総勢100人の自転車兵士たちは次々にスリップして転落、更にその転落者につまずき転落するものが後を立たない

まさにこうじらの思ひ壺だった

『上手くいったな』

拓海『あ……あ……』

拓海の表情には明らかに疲れが見えていた

俺も拓海自信も分かっている、拓海はもう限界だと

『後は任せようよ、お前のおかげでようやく引きずり出せたみたいだからな』

拓海は声もなく頷いた

『さあ……』

後ろを振り返ると沢山の脱落者が山のよつと重なっている

そのおくに人影が見えた

『出てこよ、いるんだろ?』

すると奥から男が現れた

全体的に筋肉質で長身、細い目付きにスポーツがりというオーソドックスなスポーツマン

『名前は?』

男は『須藤』とだけ答えた

『この通りを抜けたら国道の一本道がある、俺とお前の勝負だ、これしか無いだろ?』

須藤『ダッシュか……貴様、名は?』

思わず口元がゆるんでしまつ

『悪い、申し遅れた…水沢だ』

須藤『リストのダブルSランク……貴様か』

『前々から気になつてたんだけど俺つてなに?』

すると須藤は

須藤『太陽系地球内のアジア地方に分布する黄色人種であり…』

『ちょ…ちがうちがうちがう…』

須藤は口元を少しつり上げて言った

須藤『…ジョークだ』

『……』

あ…うん、こういう奴なんだな

須藤『知りたいだろ？が教えられない。すまないが……』

『いいで引かれてがる俺じゃない

『たのむよ……』

須藤『済まん』

『お願いだ！』

須藤『……』

俺は地面に膝をついた

『頼む！あんた位しか話がわかる奴がないんだ』

須藤『貴様の言いたいことはわかる……男が膝をつき頼むことは、  
それ相応の苦しみだ……私とて心が痛い、だが……済まぬ……』

俺はゆっくりと立ち上がり

『そりか…悪かつたないきなり、だけどわかつてくれ…訳も分から  
ないまま何度も切りかかられる気持ちがどんなだか…』

須藤は俺の肩に手をかけ言つた

須藤『私との勝負の後、私に勝つたらでも良いか?』

『須藤……お前!』

須藤の顔に初めて優しい笑顔が浮かぶ

須藤『正々堂々私に勝つたらな』

『お前…』

須藤は右手を差し出した

この意味は分かる、いやきっと分からぬ奴はないだろう

須藤『男と男の真剣勝負だ』

『ああ…望む通りだ』

俺と須藤は男同士の固く、熱い握手を交わした

拓海『いいからなやく終わはれよな暑苦しい、シリヒリキシ  
いんだから…』

## 第一章（後書き）

キツいです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2213f/>

---

クレイジーフック

2010年10月10日20時12分発行